Attic
trash
Drop
dead
for adult only
18

デッド

主明本です。

性癖には正直になった方が生きるのは楽だって、ばっちゃがゆってたの。
だから拘束ネタの短編三本です。明智君が縛られて無体な事をされているだけの本です。
大丈夫、私の書くものですから、ただのプレイの彩りです。

主人公の名前は、来栖暁を使用しております。明智君に対する言葉遣いは認知がガバガバです。
タイトルは韻を踏んでて面白いから以上の意味はないので、気にしないでください。
最初は、三本目は目隠し手枷おもちゃプレイのつもりだったんだけど、この本無理矢理ネタしかないわあ。と気付いたので、一本ぐらいは甘々なのを入れないと……。と思い、急遽おもちゃプレイはお流れになりました。ごめんねSさん、きっと次の拘束本で書くから。

そんな訳で純粋な和姦は一本だけなので、その辺り苦手な方は、最後の話だけ御覧ください。

きとろん

「酒ですか？　飲めますよ」
一学年下の青年がゆるく笑んでそう言った時、自分は目を見開いて驚いた。
自分の知っている来栖暁という青年は、怪盗団などという反社会的な集団のリーダーというものをしてはいるが、表向きの顔は、目立たず大人しく、どこかぼんやりとした印象の高校生だ。
てっきり、「自分は未成年ですから」「保護観察中なんですけど」とか、そんな返答が返って来るとばかり思っていたので、率直に言って驚いた。
そんな自分の様子に彼も苦笑する。
「俺、そんなに真面目な高校生じゃないですから」
「まあ、そこは否定しないけど」
「保護観察中ですしね」
だから、一見して酒を飲む様な不良高校生に見えない様に努力してます。と、想像していたのとは違う使われ方の言葉が出て来る。
納得していいものなのか解らなかった為に曖昧に笑ってごまかしたが、代わりに疑問が沸き、思いついた様に提案する。

「じゃあ、これからお酒でも飲みに行く？」
「え？」
「僕はあまりお酒は飲まないけど、君が好きなら、今日、助けて貰ったお礼に行こうか？」
どう？　と微笑んで言うと、少し、考えた風になってから、口を開いた。
「明智さん。もう少し、警戒心を持った方がいいですよ」
今日は朝から収録の仕事で疲れており、その帰りに面倒な相手に絡まれた。
強い照明と、こもった空気に長時間晒され、肌も喉もひりついている。髪も学生服も汚れた空気が染み付いた様で不愉快で局のシャワーブースを使わせて貰ったが、用意されたアメニティは変に甘ったるい匂いで、自分の趣味からは外れている。
早く帰りたくて、見苦しくない程度に急いで局を出たところで、声をかけられた。
何度か同じ番組に出た事のあるアナウンサー崩れのタレントだったか。あまり関心がない相手だったので人となりは覚えていないが、好感を持てる人物ではなかった。
その相手がどうでもいいくだらない事を言い立て、それからひどく不快な目線を自分に這わせ始め、男子高校生に向けるには相応しからぬ事を言い始めた。

仕事絡みでもあるから邪険に扱う訳にもいかず、かといって下卑た要求に従うつもりなどなく。何と言ってあしらおうか困っていたところに、彼が現れた。
『明智さん。仕事帰りですか』
『来栖君』
『俺もバイト引けたところなんです。良かったら一緒に夕飯でもどうですか』
黒縁の眼鏡のレンズの向こうの目を細め、自分と男の間に割り込む様にして近付いて来ると、いつもと変わらない調子で話し始める。
この間の全国模試の順位がどうの学校での噂話がどうのと一人で話し続ける彼に興が殺がれたのか、絡んでいた男は軽く舌打ちして去って行った。安堵のため息をつき、
『ありがとう、助かった』
と言う自分に、きょとんとした顔を返していた年下の青年。どうやら本当に状況が目に入っていなかっただけの様だ。
自分に顔を寄せ、軽く眉を寄せた時は何事かと思ったが、
『お風呂、入ったんですか？』と尋ねられ納得した。
『ああ、うん。解る？ ごめんね、今日は仕事でずっとスタジオにいたから、ほこりっぽいし、煙草の匂いもするでしょ？ シャワー借りたんだけど、制服はどうしようもなくて……』
『ああ……そういう事ですか』
得心し、何故かほっとした様な顔をするのを不思議に思いながら、せっかくだから。と、夕食の誘いに応じる事にした。
『食べたいもの、ありますか』
『何でもいいよ。君のお勧めがあったら、連れて行ってくれる？』
じゃあ、と連れて行かれたのは、高校生には少し背伸びをした、気取った店。臆した様子もないのにいくらか感心して食事を終えると、食後の飲み物が出て来た。
自分には珈琲。来栖には、細いグラス。
『……それ、お酒？』
『みたいですね』
澄んだ深緋の液体は、果実酒だろう。漂う香りからしてさして度数の高いものではなく、デザート代わり程度ものなのが解るが。
『どうして僕にはコーヒーなのかな？』
『そりゃあ……』
彼は私服だが、自分は制服姿だ。店の人間がアルコールを提供してくれる訳はないのだが、それはつまり、外見で自分は彼よりも年下だと判断されたという事で、面白くない。
『そもそも君、お酒飲めるの？』

少し、意地悪を言いたくなって笑いを含んだ声で言ってみただけだったのだが、返って来た答えは予想外の、「飲めますよ」というものだった。そして自分が続けた、「じゃあ、飲みに行く？」に繋がる。
それを聞いた来栖は少し考えた風になってから、
『明智さん。もう少し、警戒心を持った方がいいですよ』
と、真面目な顔でそんな事を言い出した。
意味が解らず、きょとんとした顔になった自分に来栖は軽く眉を寄せ、それから小さく嘆息して、「飲みに行くのは構いませんよ」と頷いた。
先述の発言の意図を聞きたかったが、当人が言葉を続けないので、大した事ではないのだろうと結論づけ、そのまま話題を繋げる。
「どれぐらい飲めるのか、お兄さんが確かめてあげる」
「怖いなぁ」
正直に言ってしまえば、「飲める」という彼の言葉を信じた訳ではない。
これぐらいの年齢の男の子であれば、喫煙の経験を無駄に誇ったり、飲める酒の量を過剰に盛ったりするのはよくある事だろう。
怪盗団のリーダーなどというものをやっているこの後輩にも可愛いところがあるではないかと内心で笑い、年齢相応の強がりを見せる後輩を少しからかってやろうという意地悪と、あわよくば怪盗団のリーダーの弱みのひとつでも握れたら。その程度の考えだった。
「じゃあ……俺のバイト先に行きますか」
「バイト先？」
「はい。あそこなら、俺が頼めば高校生にも酒、出してくれると思うんで」
「それって店としていいの？　法に触れない？」
「大丈夫です。店長も俺も、言い逃れる方法は百通りぐらい考えてありますから」
「法はクリアしてても、人としてアウトだからね？」
「大丈夫ですよ。貴方に迷惑をかけたりは、しませんから」
そういう問題ではないだろうと呆れながらも、会計の為に店員を呼び止める。財布を出そうとするのを「助けてもらったお礼だから」と押しとどめると、恐縮した様子で礼を言う。
年上らしく鷹揚に構えていると、来栖がそんな様子を見て楽しげに笑った。
「それじゃ行こうか。そこの店は遠いの？」
「新宿ですから、大してかかりませんよ」
言って向かった先は、言われた通りさして遠くもなかったが、てっきり、酒も出す。程度の飲食店か何かだと思っていたので、酒を主として供する店であるのを見て驚いた。
「君、こんなところでバイトしてるの？」

「こんなところで悪かったわね」
一見して性別を判じがたい店主は、明らかな学生服の自分を見て顔をしかめたが、高校生をアルバイトに使っているところからして、その辺りの基準はゆるい様だ。入り口で追い出される事はなく、他に客がいないのもあり、来栖の注文通りに酒精の香り漂う硝子の器を出して来た。
軽く舐め、度数の強さに軽く眉を寄せるが、来栖は楽しそうに笑う。
「明智さんとお酒を飲めるなんて、思ってもみませんでした」
「そう?」
「未成年がお酒なんて。って怒られると思ってました。また誘ってくださいね。約束ですよ」
「はいはい」
自分が何を考えているかも知らずに、無邪気に笑い、慕って来るひとつ下の青年。
保護観察中の、周囲から浮いている問題児と評されている彼だが、自分にはそんな表情を見せた事はない。最初は互いに物珍しげな視線を向けるだけだったが、幾度か会ううちに好奇心は薄れ、ただの知人としての好意から話しかけ、話しかけて来る様になった。
無条件の好意を見せ、犬の様に惜しみなく笑顔を向け、自分の言葉に素直に頷き従う後輩の屈託のなさに捩れた感情を抱きつつも、懐かれて悪い気はしない。
だが、いつもどこか読み切れない色を双眸の奥に湛えており、それが不快だった。
それを覗き込みたくて。暴きたくて。
酒が入ればそれを見られるかもしれないという考えもあったのだが。
「……」
音を上げるよりも先にカウンターに突っ伏して轟沈するとは予想の範囲外だった。
「ちょっと。ねえ来栖君」
声をかけても揺すってもろくな反応を返さないが、それも当然かもしれない。店に来てから出された幾種類もの酒は色も香りも多彩で、当然、度数も軽いものから強いものまで揃っていた。取り混ぜて飲んだ訳ではないが、この短時間ではいい飲み方だとは思えない。
自分の倍以上の速度でグラスを空にして行く彼は、当然ながら自分よりも遥かに早く酔いが回り、次第に口調におかしなものが混じり始め、少し目を離していた間に、くたりと崩れ落ちていた。
「困ったな……」
急性アルコール中毒の心配をしたが、そういった様子はなく、店主も呆れた顔をしているだけだ。
「置いてっていいわよ? 適当に放り出しておくから」

「さすがにそういう訳には……」
誘ったのは自分であるし、年長者としての社会的な責任を考えればどうかと思うし、何より、酒を薦めた挙句酔い潰れた年下の未成年を放置して帰ったなどという噂が流れ、評判が下がるのは遠慮したい。
この様子では電車に乗せても帰り着けるかどうかも怪しい。タクシーもこの時間では長蛇の列だろう。
考え、この辺りで一晩放り込んでおける様な宿泊施設はないかと尋ねると、綺麗に描かれた眉を寄せた。
「あのね。この子、普段はこんな飲み方も潰れ方もしないからね?」
「はあ……?」
発言の意図が掴めず首をかしげると、嘆息と共に、すぐ近くのホテルを教えられる。
礼を言って、隣の席の来栖の肩を揺すった。
「来栖君。帰るよ。ほら、起きて。もうちょっとだけ頑張って」
「ん――……」
辛抱強く声をかけ続けると、突っ伏していた来栖がやっと顔を上げ、身を起こした。
ほっとし、また突っ伏す前に腕を掴む。立ち上がらせると軽くよろめいたので支えてやると、会計を終え店を出る。
「すいません、ご迷惑おかけしました」
「別に迷惑ではないけどねえ……」
相変わらず何とも言いがたい表情をした店主に見送られながら、自分にもたれかかる様にして歩く来栖の体を支えてやる。
自分もそれなりに飲んでいるから少し平衡感覚が怪しいが、ここで自分までへたり込む訳にはいかない。いつもより近い顔の距離と体温に戸惑いながら教えられた道を通り、現れた建物にここかと内心で安堵する。
いかにもなラブホテルなら嫌だなと思っていたのだが、そういう施設ではない様だ。
空きはあったが選べる程ではなかったので、適当な価格帯の部屋を選ぶ。無駄な出費を内心で恨めしく思うが、さすがにここで文句を言うつもりはない。
ルームキーを受け取り来栖の腕を引いてエレベーターに乗ると、自分の肩に顔を乗せる様にして来栖がもたれかかって来る。
「明智さん……」
「なに。水？　部屋まで我慢して。もう少しだから」
「好きです」
「はいはい、僕も好きだよ」
伸ばされた両腕で抱き締められ、嘆息しながら適当に背を軽く叩いてやる。
会ったばかりの頃、からかい過ぎたのを根に持っている

のか、自分をからかおうとでもしているのか、時折こんな冗談を言うので今更驚きもしない。
エレベーターが止まったところで絡む腕をほどき手を引いて、鍵に印字された部屋番号を確認して降りる。
「明智さん」
尚も身をすり寄せて懐いて来る青年を同じ様にはいはいと宥めながら部屋へ向かうと、鍵を挿し込み扉を開けた。
据え付けのクローゼットとユニットバス。簡素な机と寝台という、個性の欠片もない宿泊施設だ。さして広くもない室内を一瞥すると、背後でオートロックの錠の下りた音がする。
「ほら、着いたよ。寝るならそこのベッドで寝なよ。清算は済ませておくから……」
室内に引き入れた青年に、寝るなら寝台で横になる様にと言い、酔いを冷ます為に歩いて帰ろうかと考えながら、部屋を出ようと再度ドアノブに手をかける。
だが、不意に肩を掴まれた事で手はドアノブから離れ、開きかけた扉は再びかちゃりと音を立てて閉じ、自分の視界が反転する。咄嗟に何が起こったのか解らず固まると、壁に手を突いた来栖の腕の中で、射竦められる様に彼に見据えられていた。
何だっけ、これ。そうだ、壁ドンだ。
今の自分の状況を表現するのに一言で済む的確な単語がある事に無駄に感謝を捧げながら、同時に現状が理解出来ず内心で首をかしげる。
「来栖君？」
自分を両腕で作った檻の中に入れている年下の青年を呼ぶ。
どうしたのだろうか。
気分でも悪くなり、縋り付こうとでもしたのだろうかと、その表情を見返す。
だが、向けられる双眸には心配した様な色はなく、むしろ静かに凪いだ視線が自分に凝っと注がれている。それは先刻までの、飲めない酒に振り回された見慣れた大人しい後輩のものではなく。
火が灯った様に薄赤く見える黒い両目に、背筋がぞくりと粟立った。
「……どうし、たの？」
それは、パレスやメメントスで時折見せる、あの底知れない深さと、苦境にあって笑う事が出来るしたたかさを思い起こさせるもので。
反射的に逃れようとその腕を外そうと手をかけるが、動く気配はない。
何のつもりだと言い掛けるが、その言葉が途中で途切れる。
彼の顔が近付いて来たと認識すると同時に、言葉を発し

かけた唇が来栖のそれでふさがれたからだ。
「……っ」
一瞬、何が起こったのか解らず。
柔らかく暖かなものが何なのかは、視界に広がる彼の顔で理解出来るし、何をされているのかも理解出来る。だが何故そんな事をされているのかが解らずに硬直する。
固まった思考が活動を再開するよりも早く、重なっていた唇は離れる。
一体なにを、と言う間もなく、今度は首元に唇が触れた。
「……っ!!」
濡れた感触が首に触れたかと思うと、それが首筋をなぞり上げ、次いで耳朶を柔らかく喰まれた。
「……ちょっと!!」
今度こそ何をされているのか理解し、胸と肩に手を突き、その体を押し返す。思いのほかあっさりと離れたが、相変わらず自分の体の横で自分を閉じ込める様に突かれた腕はそのままだ。
「どうしたんですか。怖い顔して」
「どうしたって……悪ふざけが過ぎるよ?」
「悪ふざけ?」
「そうだよ、いくら酔ってるからって……」
言いながら、ゆるく笑う来栖の表情に言葉を詰まらせる。
「ああ、まだ解ってないんですね。まあ、そうやって簡単に騙されるところが可愛いと言えば可愛いんですけど」
「……?」
何を言っているのか解らず眉を寄せる。
簡単に騙されるだの可愛いだの、反論したい事も意味が解らず聞きたい事もあるが、ゆるゆると笑いながら言う来栖に、言いかけた言葉は小さく消える。彼が何を考えているのかは解らないが、とにかく逃げないと危険だと、脳内で何かが全力で警鐘を鳴らしている。
「ね、ねえ。少し落ち着こう? 君、酔ってるんだよ。あんなに強いお酒をたくさん飲んだし」
とにかく話題を変えよう。彼は今、正気ではないという事を理解させ、物理的に離れようと必死に言い募ると、こちらの胸の内をざわつかせる色を湛えていた双眸が、ひどく楽しげに細められ喉の奥で笑う。
「ねえ明智さん。俺、言いましたよね?」
「……何、を?」
「酒、飲めますよ。って」
言って、口角を上げた来栖の双眸を見返し理解する。
薄赤く光るその目は、言葉通り酔ってなどいないのだと。
「……っ」
すう、と背筋が寒くなり、目の前の体を突き飛ばして逃げようとするが、それより先に両手首を捕まれ扉に押し付けられる。

「ちょ……来栖君……っ！」
驚き、自分を扉に縫い止めた相手を睨み付けるが、相変わらず意に介した様子はない。
「いったい、何を」
「何って、解りませんか。ここまで来て」
目が細められ、初めて見る表情と不穏な響きの言葉に視線を迷わせる。
「ね、ねえ。僕が何か君を怒らせる様な事をしたのなら、謝る……から……」
我ながら情けなくなる様な声しか出ない中、それでも懸命に言い募ると、少し、不思議そうな顔をする。それから、またゆるく笑った。
「怒らせる様な事、ですか。そうですね、不愉快なのは確かです」
「……？」
それは何なのかと無言で先を待つと、目を眇めた。
「ねえ明智さん。あんな、風呂上がりの上気した肌でいい匂いさせてたら、下種な男に絡まれるのは当たり前ですよ？」
「は……？」
言われた言葉に、目を見開く。
言葉の意味が解らない訳ではない。自慢ではないが自分の容姿に関しての評価は極めて客観的に、正確に理解しているし、それを維持する努力を怠った事もない。
故に言われた言葉の意味は充分に理解出来たし、ああ、あの男はそういう理由で下卑た視線を向けて来たのかと納得し、今度から気をつけよう。と内心で反省もする。
だがそれと彼が怒る事にどんな関連性があるのか。と思うと同時に、掴んでいた手にこもる力が強くなった。
「痛……っ」
ぎり、と音がしそうな勢いで手首を掴まれ、小さく呻く。何をするのかと抗議しようと見返すと、またあの薄赤く見える視線を向けられる。
「すぐに人を下に見て足元をすくわれるくせに、あんな無警戒に人を挑発して。その後もやっぱり無警戒に俺を酒に誘ったりするし。隙だらけにも程があるでしょう。いつも、俺の知らないところで悪い男に騙されて美味しく頂かれてるんじゃないかって、毎回毎回、気が気じゃないっていうのに」
明確な苛立ちの色を浮かべた声に、言葉通り来栖が不快さを押し殺しているのは解るが、やはり意味が解らない。
「もっとちゃんと段階を踏みたかったけど、俺の言葉をちっとも信じてくれないし、一度、痛い目を見れば警戒心も強まるかなと思うんで。……諦めてくださいね」
低い声の不穏さが増し、その声にぞくりと背筋を震わせる。

「や、め……っ、っ」
思わず上げた頼りない声に、薄赤い双眸が楽しげに細められた。
耳元にねっとりとした熱を感じ、それが耳朶を舐め上げられたからだと理解しそちらに意識が向くのと、首元のネクタイが解かれたのは同時だった。
「……っ」
耳を喰まれ、小さく水音を立てて吸い付く様にして耳殻に吸い付かれる。
次いで伸ばされた手がゆるめられた襟元から滑り込み、いいかげんにしろと声を上げるより先に、また唇がふさがれた。
先刻された様な、ただ重ねるだけのものではなく、噛み付く様に唇を貪られる。
噛み付いてやろうかと思ったが、顎を掴まれ、薄く開いた歯列の中へ強引にねじ込む様に舌が滑り込んで来る。
「ん……、んっ」
上手く呼吸が出来ず、酸素を求めて開いた口内を、入り込んだ舌が我が物顔で這い回る。逃げる舌が追い詰められ熱い舌で絡み取られ、濃厚な酒気を帯びた呼吸と混ざり合い、思考がくらりと痺れた。
その間にも合わせを解かれたシャツの間から滑り込んだ手が肌を撫で上げ、それにも息を詰まらせる。

「ふ……ぅ、ん、んっ」
重なった唇の間から響く水音に混じり、上ずった声が上がった。
「や、め」
言いかけた言葉が、また唇をふさがれ噛み殺される。
這い回る手が胸の尖りを探り当て指先で捻り上げられ、身体がびくりと震える。それを面白がる様に痛みを覚えるほど強く摘まれたかと思うと柔らかく指の腹で転がされ、漏れる息の合間に小さく声を上げた。
「……っ、ぁ」
「気持ちいいんですか、ここ」
「ちが、ぅ……っ」
そんな場所で快を得た事などない。むしろ普段はそんな場所の事など存在を忘れているぐらいだ。
だが、器用に動く手に指先ほどもない肉粒を擦り上げられるたびに、勝手に身体が震えた。押さえつけられ、自分の意思を無視した強引な行為だというのに。
「も……いいかげん、に……っ」
自分が今、性的な意図を持って触れられているというのは解る。それがどこまで本気なのかはともかく。
もしかしたら、自分が弱々しい態度でも見せればやめてくれる程度の、性質の悪いただの嫌がらせでしかないのかもしれないが、だとしても好き勝手に身体を撫で回されて

いるつもりはない。
無遠慮に口の中を這う舌に噛み付いてやろうと、きつく睨み付けた瞬間。
割られた膝の間に入れられた脚で、ぐり、と下肢を押し上げられた。
「ふ、ぁっ」
予想外の刺激に、背がしなる。
思わず漏れた声に羞恥を覚える間もなく、再度、痛みを覚える寸前の強さで大腿が押し付けられる。
「や、め」
「こっちは、気持ちいいですよね」
「ぁ、あっ」
からかう様に囁かれながら、来栖の言う通り明確な悦楽を与えられ、勝手に腰が揺れる。それに気をよくした様に口角を上げ、緩急をつけて脚の間を捏ね上げられ、息を詰まらせた。
「あ、や、ぁ、はぁ……っ！」
甘く重い刺激に、重なった唇の狭間から熱を持った声が漏れる。解りやすく明らかな性感と、体の内側を満たす酒精と、外側から思考を侵食する様に与えられる酒の薫りに、意識が引きずられそうになる。
だが、下肢に伸ばされた手に直に握りこまれ、さすがに身体を跳ねさせた。
「ちょ……来栖、くん……っ！」
さすがに、悪ふざけにしては、これは度が過ぎている。
悪趣味な悪戯なら性質が悪いし、本気ならもっと性質が悪い。
「はな、せ」
力の入らない手で、それでも強引に這わされる手を引き剥がし、身体ごと顔を背け身をよじる。
僅かに来栖の体と手が離れ、反射的に浮いた身体を捻り、逃げ出そうと扉を開ける為にドアノブに手をかけ背を向けたのがまずかった。
肩を掴まれ脚を払われ、均衡を崩した瞬間、背後から体を抱え上げられた。ほとんど体格差がない為、半ば引きずる様な形ではあったが、何があったのか解らないほど鮮やかに、寝台の上にうつぶせに身体を押し付けられる。
「来栖君！」
「これ、借りますね」
言って首元へ手が伸ばされ、解かれたネクタイがしゅるりと音を立てて引き抜かれる。
いったい何を考えているのか。酔余の冗談としても、笑えるものではない。かすれ気味の呼吸の合間に怒鳴りつけてやろうとしたが、それはまた阻まれる。
「痛……っ」
「ああ、すいません。痛かったですか」

思わず上げたのは、苦痛の声。背後に回された腕を捻り上げられ、驚き肩越しに来栖を見上げる。
見上げた黒縁の眼鏡ごしの双眸は相変わらず何を考えているのか解らない色を浮かべて自分を見下ろしている。だが、何をしようとしているのかは、すぐに解った。
「え……」
捻り上げた両腕の手首を、首元から引き抜いた自分のネクタイでひとまとめにされたのが、見えなくても肌に伝わる感触で解ったからだ。
ぞわりと、血の気が引く。
いくら何でも、冗談でも本気でも、これは行き過ぎだ。
「……っ」
不自然な体勢のまま起き上がり逃げようとするが、肩を掴まれ、仰向けにシーツに身体を押し付けられ来栖を見上げる形で目を合わせられる。
「ちょ……ちょっと、ねえ……っ!!」
「何ですか」
尚も何を考えているのかと言い掛けるが、体重をかける様にして抱きすくめられ、後ろ手にまとめられた腕にかかる重みと痛みに、声を詰まらせる。
それでも抗議の声を上げようとするが首元に顔を埋められ、かかる熱い息に身をすくませた。
「……っ、触る、なっ」

言うが、当然、聞いてくれる様子はない。
伸ばされた手が残っていた釦を外し、そのまま胸を這い回り、小さな尖りを指先で転がし、摘み上げては自分の息を詰まらせた。耳殻を噛まれ、耳朶を喰まれ、首筋に吸い付かれ、身を揺らす。
「離せ……っ！」
そう訴えるも、喉の奥で楽しげに笑う声が響くだけで、離れてくれる様子はない。ちゅ、ちゅ、と音を立ててあらわにされた肌に唇を落とし、時折、小さな痛みが走るほど強く吸い上げられる。
「……っ、ぁ」
つう、と指で転がしていた場所を舌先で押し上げる様に舐められ、走った、ぞくぞくとした感覚に思わず声を上げる。
認めたくはないが、じわりと疼く様に下肢に響くそれが何なのかはもう明らかで。
「ぁっ、……、や、めろ」
自分でも情けなくなるぐらい小さな声しか出ないが、その声に、来栖が低く笑う。
「どうしてですか」
「……っ」
どうして、などと。決まっているではないか。こんな事は、おかしい。少なくとも、自分と来栖の間にある関係性

する様な事ではない。
だというのに。
「明智さんだって、気持ちいいんでしょう？　ほら」
「あっ」
耳の輪郭を舌先で辿られ、胸の色付きを指先でにじられ、また声を上げてしまう。
それほど貞淑な人間であるつもりはないが、それでも、今の状況を受け入れられるほど不品行な人間ではない。何より、あの父親の様な享楽的な人間になるつもりはない。触れられる手指にもっと嫌悪と抵抗を覚えるべきなのに、来栖の言葉通り、押さえつけられた身体は、遣わされる手と舌に簡単に熱を上げ息を荒げさせた。
「ちが、う、ちが、ぁ……」
それを認めたくなくて、懸命に違うと言う様に首を振ると、ひどく楽しげに笑われる。
「……っ、い、あっ」
胸を這っていた手が滑り降り、びく、と震える。
胸から滑り降りた手が、布の上から下肢を握り込む様にして撫ぜ
「でもここ、こんなになってる」
「言う、な……っ」
「胸に乳首いじられて、気持ちよくなって、ここ硬くしたんですよね。かわいいな」
「違う、やめ、……ぁ、さわる、なあっ！」
手がベルトにかかりファスナーが下ろされる。何をしようとしているのかを察し逃げようとするが、後ろ手に拘束されシーツに押さえつけられた体勢で出来る抵抗など、ないに等しく。
「ほら、下着まで濡れてる」
「……」
来栖の言葉通り、スラックスの中で、滲んだ先走りが下着を汚している。思わず目を閉じ顔を背けると、開いた合わせの間から下着の中に手を入れられ、熱を持った場所を指先と指の腹で捏ねられ始めた。
「あっ、……ぁ、ぁっ、や、め」
「気持ちいいんでしょう？」
耳殻を噛みながらぐにぐにと捏ねられ揉まれ、それまで以上に息を荒げ、熱い吐息と声が漏れる。
人の手に握り込まれる感触に身を縮こまらせるが、水音を立てながらゆるゆるとこすり上げられれば、直接的な刺激に、そこは本人の意志とは無関係に熱を上げて行く。
「あ、ぁっ、やめ、そこ、強くした、ら」
顕著な反応を返す場所ばかりを指の腹でくじられ、首を打ち振るう。
ここしばらく忙しかったのもあり、最後に自分で自分を慰めたのもずいぶん前だ。そんな状態で、自分の意思の介

在しない他者の手で捏ね上げられるのは刺激が強すぎる。
強制的に引きずり出される快楽に簡単に射精感が高められ、脚の内側がひくひくと震え始めた。

「あ、や、来栖く、はなし、て」

「気持ちよさそうですよ？」

「……っ、から、でちゃう、から……っ！」

「もう、ですか？」

からかう様な声音に奥歯を噛むが、すぐにそれは漏れる声にほどかれる。

「ふ、ぁ、お願い、だから……手、はなして……っ！」

不自由な身体を揺らして必死に訴えるが、「出していいですよ」と耳元で囁かれると同時に一方の手で胸の尖りを痛みを覚える程に強く摘み上げられ、もう一方の手で敏感な裏筋を指の先でにじる様に刺激され、そんな訴えは呆気なく悲鳴の様な嬌声と共に溶けて消える。

「や、ぁ、っぁ、でる、やだ……」

高い声を上げながらびくびくと震え、来栖の手の中で握り込まれたものが弾ける。

「ぁ、ぁ……」

「……かわいい声」

「や、はな、し……」

全て出し切らせようとするかの様に尚も手の中でつくねられ、逃れようと力の入らない身体をよじるが、そんな抵抗を来栖は面白いものでも見るかの様に見下ろしている。

その視線が嫌で、どんな嘲弄を浴びせられるのだろうかと顔を背けた。

年下の後輩に酒が飲めないふりをされ自分からこんな場所に転がり込み、抵抗を封じられ、いい様に身体を撫で回され、その手で射精させられた。こんな事をされるほど自分は彼に厭わしく思われていたのだろうかと、きつく唇を噛む。

「……っ」

ざらついた感情を押さえつけ荒い息を整えていると、頬を舐められ、まだ脚の間に差し入れられたままだった手がゆるりと動く。

「ちょ、っと……っ」

今更、かく恥など残ってはいないが、いつまでも撫で回されているのは不愉快だ。

気は済んだだろうと、もういい加減に離してくれと言いかけるが。

「……っ、え、なに」

下肢に触れるそれまでとは違った刺激に、身体を跳ねさせる。

脚の間。身体の奥のすぼまりに指を這わされているのだと気付き目を見開くのと、そこに指先が埋まり、意味をなさない声を上げたのは同時だった。

「や、や、ねえ……っ！」
「何ですか」
「なに、なに、して……っ」
「何って、男同士で、どこを使うかは知ってるでしょう？」
当然の様に言われ、喉をひくつかせる。
言っている事、言いたい事は解る。解るが、理性と理解がついて行かない。
「冗談、でしょう……？」
「俺は本気ですよ」
薄赤く光る双眸に射る様に見据えられ、それまでとは違う汗が背筋を伝うのが解る。
「はなせ……っ!!」
逃れようと起こしかけた肩口を掴まれ、片手だけで難なく押さえつけられる。両腕の自由が利かないだけで、人間の体はこんなに簡単に均衡を失うものなのかと歯噛みする。
せめて自由になる脚をもがかせようとするが、浅く埋まっていた指が角度をつけて強引に押し込まれ、身を強張らせた。
「……痛、……っ」
手荒な侵入に思わず声を上げると、来栖が眉を寄せ、手を止める。それから、少しだけ申し訳なさそうに声の調子を落とした。
「ああ、これじゃ痛いですよね。気が利かなくてすいません」
「え……？　っ、ぁ」
疑問符を音にするより先に指が引き抜かれ、その感触にまた声を上げてしまうが、消えた異物感に、安堵で力が抜ける。
思い直してくれたか、とほっと息をつきかけるが、脚に絡んだままだったスラックスが下着ごと引き下ろされ足から抜かれ、肩を押さえつけていた手が背に回され、そのまま身体を反転させた。
「な、に」
シーツの上にうつぶせにされ、もう今日、何度目かも解らない問いかけを声に出す。だが、その言葉を続けるよりも先に前に回された手に腰を浮かせられ、一瞬、思考が停止した。
「な、やめ……見るな……っ！」
腹ばいに這わせられ腰を上げさせられれば、両腕を後ろ手に戒められているせいで、身体を手で支える事が出来ない。
肩をシーツに押し付け、隠すもののない下肢を高く上げさせられた自分の今の格好を想像しただけで、羞恥と屈辱で目の前が暗くなる。身をよじろうとするが、肩を押さえつけられ、開かされた脚の間に来栖の膝が入れられた。

「腕、下敷きになって痛かったでしょう？　すいません、気がつかなくて」
「ふざけるな……っ！」
痛いと言ったのはそんな事じゃないと罵倒の中に混ぜると、楽しげに笑う。
「ああ、勿論こっちも、痛くない様にしますから」
「え……？」
背後で、何かを探る物音がしたかと思うと、晒された双裂に手がかけられた。
「ひ……っ」
先刻まで来栖の指が埋まっていた場所に、とろりと、冷たい何かが垂らされる感触が届き、小さく悲鳴を上げる。次いで鼻腔に届いた人工的な香りに、何をされているのかを嫌でも悟った。
何故そんなものを、と言いたいが、粘度のある液体を垂らされた場所に、それを塗り込める様に指の腹が這う感覚に息を詰まらせる。
尻たぶを掴まれ狭間に指を滑らせ、ゆるく力を込め硬く蕾んだ縁を円を描き広げる様にして揉み解される。それから僅かに力が抜けたところへ、つぷ、と小さく音を立ててそこに入り込んで来たものが何なのかは、考えるまでもない。
「……っ、や」
「明智さん、力、抜いてください。痛くしませんから」
「出来る、か……っ！」
言うと、諦めた様に、そのまま力を込めて指を押し込み始めた。
「あ、はぁ、ぁ」
ぬめった液体のまぶされた指は、今度は引っかかりなく、ぬちりと抵抗なく中に埋まって行く。
中を探る様に浅く動かした後、ゆっくりと抜かれ、また埋め込まれる。
先刻の様に強引に押し入れられる事はなく、体温に馴染ませる様に辿る指に知らず溜息の様な声を漏らすと、指が増やされたのが解った。
「……っく、ぁ」
指の先端をゆるゆると浅い場所で出し入れし、次第に中で指を広げる様な動きに変わって行く。
「痛くないですよね」
囁かれるのに応える事はしないが、来栖も期待してはいないのか、指の動きを止める事はしない。
柔らかな粘膜を傷つけない様に慎重に、同時にその温度を楽しむ様に執拗に、次いで緊張を解くかの様に余念なく。時折指の動きを止めながら自分の呼吸を計り、だが、自分の肩を掴む手に込める力には一切の容赦なく押さえつけたまま、また指を増やす。

「は、ぁ……ぁ」
未知の感覚に肌が粟立ち冷や汗が流れるのに、身体が拾っている感覚は間違いなく悦楽で、訳が解らず荒い息をこぼした。
あられもない格好で、望んだ訳でもないこんな行為を強要する相手にもっと嫌悪を示していい筈なのに、身体はずっと前からこの熱さを知っていたかの様にその感覚を受け止め、受け入れている。
せめて声だけでも上げまいとシーツを噛むが、そんな抵抗も、次の瞬間には崩れ落ちた。
「……っ、ぃ、ぁ、来栖く、そこ、や……っ！」
「どうしてですか？　気持ちいいでしょう？」
「あっ！」
また指先に力を込められ、背をしならせる。
入り口を広げる様にして動いていた指が中の腹側の粘膜を指の腹で撫で上げ、押し込む様にして擦り上げると、それまでとは比較にならない強い感覚が内側から襲い掛かって来た。
「や、ぁ、ぁっ」
不自由な姿勢の中で視線をやると、強引に吐精させられうなだれていた自分のものが、また首をもたげ蜜をこぼし始めている。
自分の身体の反応が信じられず目を見開くが、ひときわ強く内側の一点を捏ね上げられ、悲鳴にも似た声を上げた。
「あ、ぁ、はぁ、ンっ」
くちゅくちゅと音を立て指が抜き差しされ、それよりも大きな自分の上ずった声が絶え間なく上がる。声を噛み殺したいのに、それを見越した様に力の抜けた瞬間に強く刺激され、その度に自分の声と、下肢の熱が上がった。
指を三本銜え込まされ、柔らかく抉られている場所が何なのか、知識では知っている。そこを刺激されれば身体は勝手に反応するという事も。だが、だからといって、羞恥が消える訳ではない。
「明智さん、ここ、ひくひくしてます。そんなに気持ちいいですか？」
「ち、が……ぁ、や」
必死に首を振るが、触れられてもいないのにゆるく立ち上がっているものの先端を指先でくじられ、否定の声も中途で途切れる。
「前も後ろも、こんなにどろどろにして。指がふやけそうですよ」
いつの間にか肩を押さえつけていた手はなく、背後で指を抜き差ししながら、空いた手はびくびくと震える自分の反応を楽しむ様に腰や脚、胸をいたずらに這い回っている。やめろと、触るなと言って逃れたいが、震える手足には力が入らない。

思い通りにならない自分の身体に苛立ちを覚え、ぎし、と音がする勢いで戒められた手首を解こうとするが、咎める様な声が降って来る。
「駄目ですよ」
「ぁ……っ」
嗜める様な声が降って来たかと思うと、埋められていた指が音を立てて引き抜かれた。
名残惜しげに内側を撫でて行った指に小さく声を上げ、無意識のうちに腰を揺らしてしまう。それが嫌で唇を噛んでこもる熱から意識を逸らせようとするが、揺れる腰を掴まれ、ぐ、と引き寄せられる感覚に、ざわりと背筋が粟立つ。
双裂の谷間のぬかるみにひどく熱いものが押し当てられ、自分の意思に関係なく、吸い付く様にしてそれが僅かに埋まるのに身を強張らせた。
「……っ、な、に」
肩越しに、背後を見上げる。
前を寛げた来栖が、下衣から取り出したものをたった今まで指で嬲っていた場所にあてがい、薄く笑いながら自分を見下ろしている姿に、忘れかけていた抵抗を思い出すのと、
「――っ、っ、や、め」
指とは比較にならない熱と質量のものが入り込んで来たのは同時だった。
「あ、ぁ――っ」
「は……きつ……」
何をされるのか、解っていなかった訳ではない。そこまで子供ではない。だが途中で正気に返って、やめてくれるのではないかという淡い期待を抱いてもいた。
だがそんな期待も空しく、来栖が溜息の様な声を漏らしながら軽く身体を揺すり立て、更に奥へと入り込もうとする。ほぐされた泥濘は指で広げられていた時を忘れたかの様にきつく侵入を拒むが、力を込め、強引にくびれまでが押し込まれた。
やめろと叫びたいが、狭い場所を指とは違うもので押し広げられる異物感は相当なもので、浅く息を繋ぐばかりだ。
「ぁ、ぁ……」
先端を飲み込ませ、僅かに腰を引き、また軽く埋める。ゆるゆると浅い場所での抽挿を繰り返し、半分がた埋まったところで、また抜け落ちる寸前まで引く。
幾度かそんな行き来を繰り返され、単調な動きに僅かに安堵を覚え力が抜けたところに、残った部分を一息に押し込まれた。
「あ、は、っ、う、ぁ……」
「……全部、入りましたよ」
耳元で囁かれ、耳朶を噛まれる。

「そんなに痛くはないでしょう？」
来栖の言葉通り、恐れていた裂かれる様な痛みはない。
だが、圧迫感と狭い場所を限界まで押し広げられる苦しさに呼吸もままならず、かすれた息をこぼした。
「動きますよ。ほら、力抜いて」
「や、め、やぁ……っ」
手のひらで軽く尻たぶを張られ、走る小さな痛みに弱々しく鳴く。
もうやめてくれと訴えるが聞いてくれる様子はなく、前に回された手に萎えかけていたものをゆるく握り込まれた。
「は……、っ、ん」
僅かに身体の力が抜けたのに合わせ引き抜かれ、ぐちりと押し込まれる。圧迫感に息を詰まらせるが、また抜ける手前まで引き抜かれ、再度押し込まれた切っ先が内壁を掠め身を仰け反らせた。
「あっ、ぁっ、」
腰を引いて逃げようとするが、簡単に引き戻され、更に深く埋め込まれる。
熱い塊にずるずると敏感な場所を押し開かれ、浅い抽挿と深い侵入が規則性なく繰り返され、飛びそうになる意識を必死に引き止めた。
「っく、ぁ……は、ぁ、あっ」
「ナカ、すごい、絡み付いて来る」
荒い息をつきながらそんな言葉を落とし、それでも少しは遠慮がちだった動きが容赦のないものに変わり始める。
腰を打ちつけられる度、寝台が軋む音に合わせ淫猥な水音が響き、その音に耳まで犯されているかの様に思え、必死に身をよじった。
「や、だ……っ、くる、す」
「やだ？」
何とか上げた拒絶の言葉に、笑いを含んだ声が返る。
低く笑い、角度をつけ、ぐり、と指で散々弄られた内側の膨らみを突き上げられ、明らかな嬌声が上がった。
「でもここ、好きですよね？」
「あっぁっ、やめ、それ」
「明智さん、ここ、好きですよね」
再度聞かれ、違うと言いかけるが、がつがつと容赦なくそこを押し上げられ悲鳴じみた声を上げる。
「気持ちいいんですね。きゅうきゅう締め付けて来る」
「……ぁ、あっ」
来栖の言葉通り、自分の身体は最初は受け入れたものを押し出そうと懸命に締め上げていたが、弱い場所を穿たれる度に、悦んでいるかの様に勝手に蠢動し入り口をひくつかせている。
男を受け入れたまま、悦楽を覚えている。自分のそんな

身体を一度意識してしまえば、それまでだった。身体が勝手に中に埋め込まれたものの熱さと形をありありと感じ取ろうとし、離すまいと締め上げる。上がる声が涙混じりなのも、苦痛からではない。

自分にそんな感覚を与え好き勝手に身体を揺さぶっているのは内心で見下していた年下の男だという現実と、聞いた事のない様な声を上げているのは自分だという現実。それを認めたくなくて、逃れようと自由にならない腕を、ぎしぎしと音がしそうな程にもがかせる。

「駄目ですよ。痣になる」

「ほどいて、手、ほどいて……っ！」

「終わったら、ちゃんと解いてあげますよ」

まとめられた手首を押さえつけられ、そんな些細な抵抗も封じられれば、後は快楽に押し流されるだけだ。打ち込まれた肉槍をすがる様に舐める内壁は、奥へ奥へと誘い込む様に男を食い締める。

抗わず最奥まで入り込んだ杭が柔らかな場所を先端で叩き、音を立てる行き来と共に立て続けに内側のしこりを擦り、穿ち、押し上げて行く。前に回された手がたらたらと蜜をこぼしているものを握り込み、責め立てる動きに合わせて過敏な場所に指を這わせた。

「も、ゃぁ、そこ、ばっか、り、はなせ……ぁ、ぁ、あっ！」

切れ切れに言葉を繋ごうとするが、最後まで言い終える事なく声を詰まらせる。ごつりと抉る様にして貫かれ、同時に指先で痛みを覚える直前の強さで先端をこじり上げられ、目の前が白くなった。

「い、ぁ、……く、ぁ――っ！」

どろりと、来栖の手の中で温かな白濁が飛び散る。

は、は、と浅く息を繋ぎ、だが熱を吐き出させた手がまだ離れようとせず、止まりもせずに中を穿ち続けるのに懸命に抗った。

「くる、す、くん、だ、……め、」

「俺はまだです」

「だめ、や、今、イって……ッぁ、あっ」

もう触るなと必死に言い募るが、男の下肢は容赦なくがつがつと内側を突き上げ、萎えたばかりのものを手で捏ね、悲鳴に近い嬌声を上げさせられる。

「やだ、も、や、も……」

「もう少し、ですから」

「あ、はや、く、もぉ、僕の中に、だして……っ！」

さっさと射精して終わりにしろ。という以上の意味はなく、来栖もそれは解っていただろうが、途切れ途切れにこぼした言葉に一瞬、その動きが止まる。それから、低く喉を鳴らす様に笑う気配がした。

「……また、そうやって煽る様な事を言う」

伸ばされた手に顎を上げさせられ、強引に後ろを向かさ

れる。
「ん、ぅ……っ」
背後から覆いかぶさる様にして顔を近付けて来たかと思うと、唇がふさがれる。喰む様にしながら噛み締めた唇をほどかれ、舌を引き出され甘く噛まれた。
「ん、ぁ、ぁ」
ぴちゃぴちゃと舌を絡められ、唾液がおとがいを伝い、シーツに滴る。
苦しい姿勢の中で執拗に貪られ、また呼吸が絶え絶えになり、まだ充分に強い酒精の香りに、意識がくらりとする。アルコールと快楽に理性をねじ伏せられれば、後はもう鳴く以外に出来る事がない。
不自由な姿勢のまま激しくなる抽挿に、視界ががくがくと揺れる。
「あ……ッ、ぅ、はあ、も、……っ！」
「明智、さん……っ」
涙でけぶる視線の先の来栖が、余裕のない表情で荒い息を漏らしている事に少しだけ溜飲を下げるが、最奥まで穿たれ、かすれた声を上げげた。
「なか……出します、ね」
「あっ……そんな、や、め」
やめてくれと訴えるが、「先刻、中に出してって言ったのは明智さんでしょう？」と、それ以上の抗議を封じる様にうなじに歯を立てられる。
「い……っ」
走る痛みに小さく苦痛の声を上げ、その刺激に、達したばかりでまだひくひくと震えてる内側が無意識のうちに喰んでいる来栖を締め付ける。
「んぅ……っ、ん……っ」
「……っ、は」
一際深く強く刺し貫かれ、背後で息を詰まらせる気配がしたかと思うと、弾けた熱が中に注ぎ込まれたのが解った。ひどく長く感じられるそれに最奥を叩かれればびくびくと震え、絶頂後も絶えず刺激され続けた自分のものもまた快楽の波に流され、来栖の手の中で薄くなった蜜をこぼした。
「ぁ……は、ぁ、ぁ……」
「……気持ちよかったです」
こぷこぷと熱を吐き切り、下肢を抜ける感覚に思考が溶ける。
ゆるゆると弛緩した身体に重なる肌の温度をどこか心地よく感じていると、耳朶や肩口に唇が這う。時折強く吸われ痕を残されているのをぼんやりと知覚しながら、まだ自分の中にいる来栖が退くのを荒い息を漏らしながら待つ。
「ね……え」
「何ですか」
「もう、これ……ほどいて、よ」

これ、とは、言うまでもなく、自分の両手首を戒め拘束しているものだ。もう終わったのだから、これ以上こうして腕を束ねられている理由はない筈だ。
そう訴えると、不思議そうな声が降って来る。
「どうしてですか？　終わったらほどいてあげますって言ったでしょう？」
「だって、もう終わ……っ」
言いかけ、だが不意に下肢に走った感覚に、びく、と身を強張らせた。
「え……ちょ、ちょっと……っ」
「何ですか？」
今度はどこか楽しげな声に嫌な予感を覚え肩越しに来栖を見上げ、もう抜け、ほどけと言いかけ、絶句する。
見上げた薄赤い双眸はまだ情欲の色をありありと映しており、こちらを見下ろす視線に含まれる無言の要求は明らかだった。自分の中で、また熱を持ち、質量を増したそれの様に。
顔を引きつらせ、弱々しく離してくれと言った自分に、来栖がゆるく口角を上げてから口を開く。
「だから言ったでしょう。酒、飲めますよ。って」
もう少し警戒心を持った方がいいと、大人しい後輩の顔で言った時とは違う声音で笑った。

hand
cuff

どうしてこんな事になったのだろうかと、ぼんやりと考える。
　自分のやっている事、やった事が法的にも倫理的にも誤った事であるなどというのは、誰に言われずとも自覚している。
　ろくな死に方は出来ないだろうと思っていたし、自分の中の歪んだ復讐を終えた後、生き延びられるとも思ってはいなかった。
　いつ消されてもいい様に身の回りは常に綺麗にしてあるし、他者に大して未練が出来る様な余計な感情も抱かない様にしていた。
　一人で生きて一人で死ぬ。それが相応の人生だろう。
　その程度の覚悟はしていたが。だが。
「ん……、ん、ぅ」
　水音と、苦しげな自分の声が部屋に響く。
　息が苦しくなり、口内にあったものを引き出し荒い呼吸を繋いでいると、ジョーカーのからかう様な声がすぐ上から降って来る。
　視線を上げると、赤い虹彩が楽しそうに自分を見下ろしており、かけられる言葉が苛立たしくはあったが、言ったところで軽口を止めてくれる訳もないのは、もう知っている。
「ほら、クロウ。続けないといつまで経っても終わらないぞ」
「……」
　逃げ出したいが、両腕は背後で戒められている。
　手錠と呼ばれる硬い金属の輪は今では自分の体温が移り、最初の様な冷たさを返して来る事はないが、不快な痛みは逆に強くなっている。苛立たしいが、どうせこれも、言ったところで外してくれる筈もない。
「……」
　髪を掴む手にかかる力が強くなり、寝台に腰掛けたジョーカーの前に跪き、諦めた様にまた脚の間に顔を埋めた。
　寛げられた下衣から覗く肉茎の先端に唇を押し当てると、頭にかけられた手が髪を梳き上げ撫で上げる。その柔らかな手付きに、苛立ちにも似た憤りが沸く。こんな場所に自分を軟禁して、望まない行為を強要する様な恥知らずのくせに。と。
　目の前のものから意識を逃避させる様に、目を閉じここまでの事を思い返し始めた。
　自分がこの男を。
　来栖を、ジョーカーと怪盗団を裏切ったのは、最初から

決めていた事だ。

その事に後悔はないし、悪い事をしたとも思わない。思わない様に、彼に向ける銃口が揺らがない様に、距離を詰めようとして来る彼からは意図して距離を取っていた。

父親に対する復讐心以外では初めて自分の心を強く揺らした青年を手にかける事に思うところがなかった訳ではないが、今更後戻りなど出来よう筈がない。

複雑な感情を噛み砕きながら過ごす日々の中。

来栖を手にかけた時に衣服にまとわりついた硝煙の匂いが消える前に、自分は彼に攫われた。

学校帰りに彼に呼ばれた気がしてふと顔を上げ、次に目を開けた時にはこの、冴のパレスの中だった。

『久し振り、クロウ』

薄く笑って言う、こちらの世界ではジョーカーと呼ばれる来栖の姿に驚きはしたが、心のどこかで予想もしていたのだろうか。

自分でも不思議なぐらい落ち着いて、自分をここまで連れて来た黒衣の怪盗を眺めた。

予想通り、獅童から離れる様に、どうせ殺されるだけだと言われたが、そんな事は最初から織り込み済みだ。目的を終えた後ならば自分の命などどうでもいいと平坦に言うと、ジョーカーの薄赤い双眸が色を増し。

次いで引き倒され、力ずくで身体を開かれた。

怪盗などというものをやっている様な男だ。遵法精神などというものの持ち合わせは期待してはいなかったが、かの体育教師の所業に憤っていたのだから、そういった倫理観はあると思っていた。

だがジョーカーは屈辱の色を滾らせた自分を、何を考えているのか解らない目線で見下ろしながら揺すり立て、訳の解らない事を言い続け、ここへ閉じ込めた。

『現実世界の冴さんは、もう明智を敵と認識してるから』

その言葉通り、彼はこの部屋へ自由に出入りを繰り返すが、自分はここから出る事が出来ない。

高級カジノの利用客用の居室だ。衣食住の全てに不自由こそないが、自由はない。

『……君、何考えてるのさ』

その問いかけにジョーカーは答えなかったが、以来、ここを訪れては自分の身体を苛んだ。

抵抗せずにいる訳ではないし、今日も訪れたジョーカーの隙を突いて得物を奪略したつもりだったが、次の瞬間にはあっさりと床に転がされた。

「クロウは物騒だから、こうやって拘束しておかないと厄介だな」

「……」

押さえつけられ、両腕を後ろ手に捻り上げられ小さく苦痛の声を上げ、やっと解放された時には、冷たい銀の手枷

が両手首にかけられていた。
その後は開かされた口の中に男のものを押し込まれ、奉仕を強制された。
無論、好きで従っている訳ではないが、一度、徹底して抗った時にはよりによって色欲の錯綜を起こされ、思い出したくもない醜態を晒す事になった。あれに比べれば、この羞恥を耐える方がはるかにましだ。
「この服、禁欲的でいやらしいよな。そこに手錠をかけるとか、更にそそる」
「……」
揶揄の色の強い声に屈辱で頬が染まるのが解るが、反論はしない。
こちらの世界で自分がまとう、白い衣装。
手錠をかけられた為に全てを脱がす事は出来ず下衣だけを取られたが、全裸よりも羞恥を覚えるのは不思議なものだ。
「……悪趣味だね、君」
それだけ言うと、再度、先端に唇を押し当てた。
それから、おもむろに口に含む。熱を上げた場所をゆっくりと舌で舐め上げると、溜息の様な吐息が頭上から漏れた。
「クロウ、しゃぶるの上手くなったな」
また幹の熱が上がるのを感じながら、先端の窪みにこじる様にして舌先を押し込み、力を込めて無造作にくねらす。
口を離しゆるりと立ち上がったそれの先端から根元まで舌を押し当て舐め下ろし、付け根の膨らみにまで舌を這わせた。
「ん……ぅ」
先端を喰み直すと、眉を寄せながら口を開き深く口内のものを咥え込む。
喉を突かれる一歩手前まで引き入れ、舌全体で舐めずりながら、緩慢な抽挿を開始した。
「ん、く」
手が使えないから、全体を押し包む事は出来ない。苦しくはあったが、少しでも早く終わらせる為に、脈打つ肉杭に懸命に奉仕を繰り返す。
「は……。うん、クロウ、上手」
息を荒くしたジョーカーが髪の間に差し入れた指先が、乱れるのが解る。
その事にどこか満足を覚えている自分を自覚しながら、含めるだけ口に含み、目に見えた反応を返す場所を舌先で刺激し続け男の欲を煽った。
「出すぞ、クロウ。全部飲め」
「ん……ぅ、ぅ」
ぐちぐちと口の中で響くこもった水音の間隔が次第に早くなる。上がる熱と同じ様に、含みきれなくなる程に質量

を増したものが更にそれを上げ。
「ん、ぐ、う……ッ！」
「っ、く……」
低く呻き、頭を掴まれ腰に押し付けられたかと思うと、一瞬の空白の後に、口内に生暖かなものが吐き出される。独特の味と匂いのそれが口の中を満たす感覚と苦しさに涙が溢れるが、逃げようとはせず、必死に喉を上下させる。
「……こぼすなよ。全部飲めなかったら、最初からだから」
浅い息を漏らしながら自分の髪を撫でるジョーカーの声は笑い混じりだが、それが紛れもなく本気である事は経験上、嫌と言うほど知っている。
「は、ぁ……っ」
「よく出来たな。いい子」
髪を撫でられながら、注がれたものを唾液と一緒に何とか飲み下すと、小さく咳き込む。
涙を滲ませて必死に呼吸を繰り返していると、伸ばされた手が腕を掴む。床に座り込んだままの身体を引き起こされるが、両手首は手錠でまとめられたままであるから、不自然な体勢で走った痛みに苦痛を訴える。
「ああ、ごめんな。ほら、立って。ベッドに上がって」
「……」
のろのろと身体を起こし、言われた通り寝台へと乗り上げる。
今日は何回で許して貰えるのだろうかと考えながら諦めた様にシーツの上に上がると、クッションを背にしたジョーカーの膝の上に腰を抱いて引き寄せられる。
「……っ」
脚を開き男の腰の上に跨る様な体勢に頬に熱が昇るのが解るが、上衣の裾を引き上げられ、むき出しの下肢をあらわにされる羞恥には思わず目を閉じた。
「クロウ、俺のしゃぶって立たせてたんだ？」
「……」
ジョーカーの指摘通り、自分のものは首をもたげ、先端を滲ませている。男に奉仕しながら、幾度もそれに貫かれた時の事を思い出し勝手に反応してしまった身体に泣きたくなる。
唇を噛む自分に、だがジョーカーは楽しげに上衣の前を留める釦に手をかけ外し始め、隠れもなくなった胸の尖りを指先で捻り上げた。
「っ、ぁ、あ」
最初のうちは触れられてもくすぐったいばかりだった場所は、執拗に刺激され、今ではそこで快を得る事を覚えてしまっている。
顔を寄せられ、じゅうと音を立てて吸われると、自分でも情けなくなる様な濡れた声が上がった。
「はぁ、ぁ、ふ」

胸から腰、むきだしの脚までをゆっくりと丁寧に、どこか偏執的に撫でられ、浅い声を漏らす。ぞくぞくする様な心地よさに知らず媚びる様な声が上がるが、ジョーカーはそれを聞いて楽しげに目を細めた。

「……っ、ぃ」

その身体が、びくんと強張る。

撫で下ろされた手が背後の双裂を掴み、その奥のすぼまりに前触れなしに指を押し入れたからだ。

いつも、執拗にそれ以外の場所を昂ぶらせてから触れて来るので突然の刺激に身体は驚くが、無遠慮に突き立てられた指を中でぐるりと動かされると、膝立ちの背がきつくしなった。

「ふぁ、あ」

一度抜かれ、先端の先走りを掬いその指を後ろに回すと、塗り込める様にして再度、指を押し込んで来る。最初から遠慮もなしに中の過敏な場所を指の腹で押され、無意識のうちに中を収縮させてしまう。

「まだ柔らかいな。これならすぐに入れられるか」

昨夜、幾度も受け入れさせられた名残でまだゆるくほころんでいたそこは、難なく押し込まれた指を受け入れる。

「ん、あ、はぁ、あっ」

熱いぬかるみを捏ねられ前が勝手に反応し、こぼれるものをまた掬われ、くちゅくちゅという水音が自分の声と一緒に部屋に響き始める。

二本、三本と増やされた指が躊躇なく入り口を広げ、中を押し広げ、熱を上げる場所を押し込み、掠め、時折わざとその動きを外しては自分の熱を煽り立てて行く。

「すごいな。とろとろだ」

「あっ、や、言わな、で……っ」

「本当の事だし。気持ちいいんだろ？」

「っ、や、ぁ、なか、さわら、な……ひろげる、なぁ……っ！」

出る言葉こそ拒絶だが、実際には指の動きに合わせ腰は揺れ、濡れた粘膜はもっと大きなものが欲しいとばかりに貪欲に指を飲み込みしゃぶっている。

早く終わらせてくれと思うが、そんな思考を見透かした様に時間をかけて狭い入り口は慣らされ、柔らかな内壁と色付いた縁は自分の意思と無関係にうねり蠢動を繰り返した。

「あ、ぁ、や……っ！」

一度も触れられないままに達し、休む間も与えられずまた内側から強引に立ち上げられ、とろとろと先端を濡らし始めるまで指での行き来が繰り返される。だが決定的な刺激は与えられず、浅い場所での緩慢な愛撫の繰り返しに視界が霞み始める。

絶え間なく立てられる濡れた音と一緒に後ろ手にまとめ

られた手からは金属質な音が耳障りに響き、その硬質な音と痛みで理性を引き止めていたが、耐え切れずに懇願する。

「も、いいから、はや、く……っ！」

指での刺激に耐えられず、先を促し急かす様に喰んだ指を締め付けると、ジョーカーが喉を鳴らしながら笑う。

「早くって、何が？」

こちらの言いたい事など解っているであろうに、底意地の悪い言葉で羞恥を煽られ、涙が滲む。

「も、指、いいから……はやく、いれ、て……っ」

「やらしいな。そんなに欲しいのか？」

笑いながらの揶揄の言葉には答えず、膝立ちの身体をジョーカーの手に押し付ける様にして腰を揺らすと、指が引き抜かれた。

「や、ぁ、っ」

意図しない声がこぼれ、そこに混じる媚びる様な色にまた羞恥を覚えるが、それを噛み殺そうとするより先に腰に手をかけられ引き寄せられる。

膝立ちにさせられた震える脚を撫で、掴んだ腰をそのまま落とす様に力を込められると、目を閉じ息を吐きながら抗わずに下肢の力を抜く。

「ん、ぁ……っ！」

ぐずぐずにとろけた場所に押し当てられたものは充分な硬度を取り戻していて、その熱さに、ひくりと身を震わせる。

ぬちりと音を立てて先端を飲み込んだそこは一瞬の抵抗の後に一番大きな箇所を受け入れ、後は苦もなく奥まで侵入を許した。

「んっ、ぁ、はぁ」

指とは違う熱さと質量に満たされ、呼吸が詰まり細い息が漏れる。

充分にほぐされ慣らされた入り口は断続的に飲み込んだものを締め上げ、内壁は全体を味わう様にして舐めずる。

圧迫感は強いが、軽く腰を揺らされ、広がった甘く滲む悦楽に肩を跳ねさせて悲鳴を上げた。

「あっ、あっ」

息を整える間も与えられずゆるゆると腰が揺らされ始め、口元からは切迫した声が漏れる。体温が馴染み、やっとその大きさに慣れ始めたところで内壁を捏ね上げられ、強すぎる性感に目の前が白くなった。

「ふ、ぁっ、ぁっ、あ、ぁ」

「……かわいー声」

弛緩した身体のせいで根元まで飲み込まされ、最奥を幾度も穿たれる。

少しでも熱を逃がそうと身をよじるが、力の入らない膝と腰ではどうにも出来ず、逆に意図しない場所を抉られ悲鳴を上げさせられた。

「やぅ、ぁ、ンっ、ぁ……っ！」
ジョーカーの肩口に額を押し当て少しでも身体を浮かせようとするも、そんなささやかな抵抗を笑う様に、掴まれた腰を引き下ろされては内壁を擦り上げながら限界まで含まされる。
見下ろした自分のものはぽたぽたと震えながら白濁を垂れ落としジョーカーの黒い衣服を汚しているが、相手は気にした様子もなく、むしろ楽しげに笑う。
「クロウは、俺にマーキングでもしたいのか？」
違うと言いたいが、だらしなく開いた口元からこぼれるのは濡れた嬌声ばかりで。
望まぬ行為なのだから、もっと嫌悪や拒絶を覚えてもいい筈なのに、あるのは屈辱と羞恥だけだ。
自分の身体はこんなにも快楽に弱く淫蕩だなどと、知らなかった。やはり自分はあの男の様に性的にだらしのない人間なのだろうかとぼんやり考えるが、そんな思考も、ひときわ強く抉られ簡単に押し流される。
「や、ジョー、か、ひ、ぁ、あっ」
「中、ぐちゃぐちゃに絡み付いて来て、すごく、いい」
「ぁ、や、やめ」
「やめろって言っても、クロウだって自分で腰、動かしてる」
言葉通り、不自由な体勢の中、快楽をより深く得ようと自分の腰が勝手に揺れている。それに羞恥を覚える余裕は、もうない。
気持ちいい。
気持ちいい。
でも苦しい。
でも気持ちいい。
もっとして欲しい。
痛い。
痛いというのが、自分の背後でがちゃがちゃと耳障りな音を立てている手錠によるものだというのに思い至る。不自然な体勢と、無機質な素材が食い込んだ手首が、痛い。
それが嫌で、のろのろと顔を上げる。
「は、ぁっ、ね、ぇ……っ」
頼むからこれを外してくれと切れ切れに訴えるが、薄く笑ったジョーカーが、自分の頬に手を伸ばす。
「なあクロウ」
「ぁ……？」
「その手錠。俺が捕まった時に使われてた手錠なんだ」
低音で紡がれた言葉に、一瞬で煮えていた様な思考が冷え、びくりと身を震わせる。次いで、諦めた様に視線を逸らした。
彼が何を考えて自分の手にそんな悪趣味なものをかけたのかは解らないが、意趣返しであるのなら、懇願したとこ

ろで外してくれる事はないだろう。
「い、ぁ……っ、ぁ、ぁ」
漏れる吐息を唾液と一緒に懸命に飲み下しながら、彼がどんな目で自分を見ているのか知りたくなくて目を閉じると、最奥まで貫かれる動きが、早く、手荒なものになる。
既に知り尽くされている身体は今日もこのまま彼の気の済むまで苛まされるのだろうと、拘束による鈍い痛みと快楽に身を任せようとした時。
「なぁクロウ。パレスの中って、パレスの主が望めばどんな世界も作れるんだよな」
「……ふ、ぁ?」
「現実に則しながら、明らかに現実と違う法則で動く世界。そこにいる人達も含めて」
何を今更と思う。自分を明確な敵と認識した冴が自分をこの部屋に隔離した様に、パレスが主の意思を反映し姿や法則を変えるのは当然だ。
「別の相手のパレスの話だけど。俺、別の生き物に変えられたりしたんだよ。この冴さんのパレスも、そんな事が出来るのかな」
「ひぅ、ぁっ」
胸の尖りを摘み上げられ、首を打ち振るう。
ジョーカーが問いかける様に言葉を続けるが、何を言いたいのか解らず、声も出ず、まだわずかに動いている思考回路の中で続く言葉を待つが。
「なぁ。そんな風に、生物としてのあり方まで変える事が出来るのならさ」
胸から滑り降りた手が、自分の汗とそれ以外の体液で濡れた下腹をゆるりと撫でる。
「例えば。男でも孕める世界にするとかも出来るのかな」
「……っ」
低く呟かれた言葉を、最初は理解出来ず。
それから目を見開き、顔を上げジョーカーを見る。趣味の悪い冗談だ。という色を浮かべているのを期待して。そして薄赤い双眸が、見た事もない様な昏さで自分を見据えているのを認め、その期待が裏切られたのを知り。
「……や、め」
反射的に逃げようとするが、ごつりと音がするのではないかと思うほど深く刺し貫かれ、あられもない声を上げた。
「ふぁ、あ、や、だめ、……っ!」
脚の間から上がる水音と、手錠の細い鎖の立てる音が、自分の悲鳴じみた懇願の声と不規則に混じり部屋に響く。
この世界が一体どんな法則で存在しているのかは解らないし、実際にそんな事が起きるかどうかは解らない。だがもしそんな事が叶うのなら、などと。思考の端に乗せるだけでも、恐怖で目の前が暗くなる。
「やめ……だす、なぁ……っ!!」

涙混じりの声で叫ぶ様に訴えるが、腰を掴み揺さぶる力がゆるむ事はない。
揺すり立てられる度に狭い場所に捻じ込まれたものは質量を増し、内壁と最奥を容赦なく抉り抵抗の力を奪おうとする。自分の身体も持ち主の意思に関係なく喰い締めたものを搾り取る様にしゃぶり、解放を誘う。
「……っ、そんなに締めなくても、今、出してやるから」
「や、ぁ、あっ、やだ、おく……ッ！」
やめてくれともう一度叫んだのと、ジョーカーが息を詰めるのは同時。それを追う様に一番奥まで捻じ込まれ、身体を仰け反らせる。
「いッ、ぁ、あぁぁ……っ！」
「……ッ」
自分の中で脈打つ肉の熱さと、どくどくと注がれる音まで解るのではないかと思う勢いで内壁を白濁で叩かれ、重ねて自分も達し、声も出せずにびくびくと身体を震わせた。
「ぁ……ぁ……」
ぼろぼろと涙をこぼしながら、温かな感覚が下肢の中を満たすのを感じ、必死に首を振る。伸ばされた手が髪や頬を撫でるのを身をよじって逃げようとするが、強引に引き寄せられ、深く抱き締められた。
「はなせ……もぉ、はなせ……っ」
不自由な身体で懸命にもがくが、ジョーカーはそんな声が聞こえていないかの様に、ひどく楽しげに頬を撫でながら囁く。
「……最初からこうすれば良かった。どうせ何を言ったっておまえは聞いてくれないんだから、聞いて貰おうなんて考えたのが間違いだった」
「なに、を……」
向けられる双眸は、自分の知る濃い黒でも、こちらの世界で見せる薄赤いものでもなく、どこか焦点のずれたもので。
背筋を這い登るぞわぞわとした冷たい恐怖が更に強くなる。
「やだ、も……やめ……」
逃れようと血が滲むほど両手首をもがかせるが何の抵抗にもならず、手錠を掴み身体を背後に引かれ、今度は上からジョーカーに圧し掛かられる。
どうしてこんな事になったのだろうかと、ぼんやりと考える。
自分のやっている事、やった事が法的にも倫理的にも誤った事であるなどというのは、誰に言われずとも自覚している。
ろくな死に方は出来ないだろうと思っていたし、自分の中の歪んだ復讐を終えた後、生き延びられるとも思ってはいなかった。

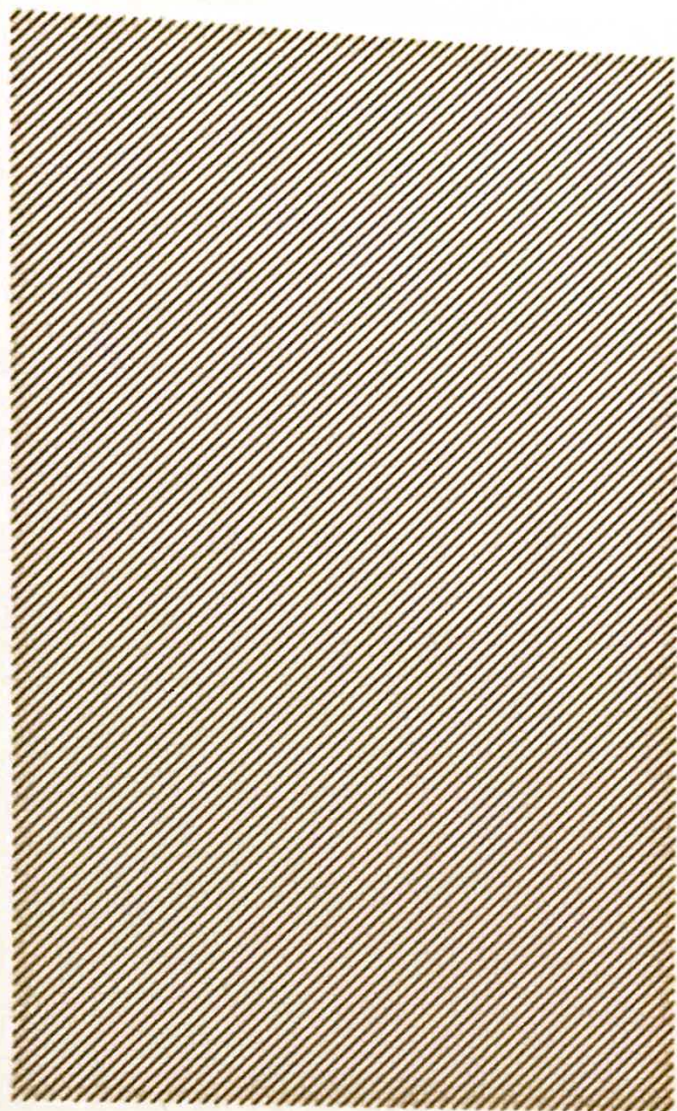
いつ消されてもいい様に身の回りは常に綺麗にしてあるし、他者に大して未練が出来る様な余計な感情も抱かない様にしていた。

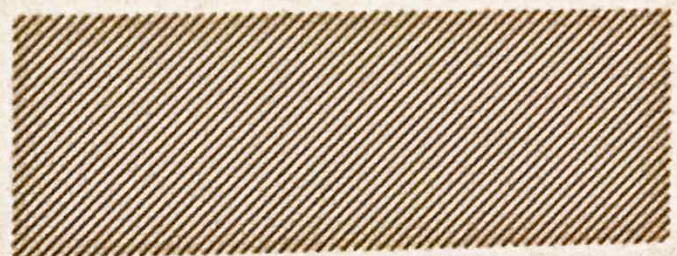
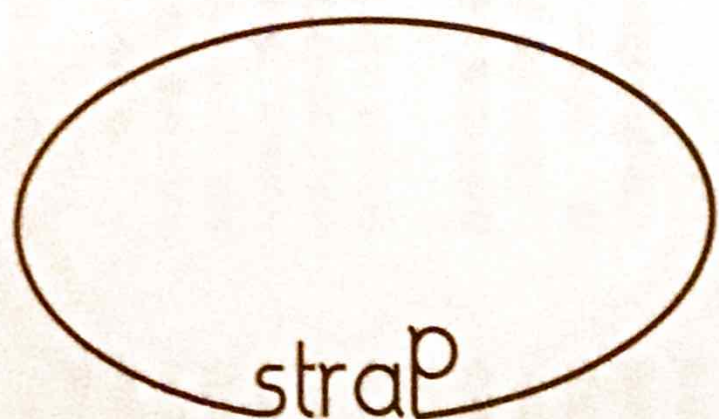
一人で生きて一人で死ぬ。それが相応の人生だろう。

その程度の覚悟はしていたが。

だが。

「もし今回のこれも間違いなら。次は明智に会う前に、こうしてやるから。そうすればきっと、間違えずに済む」

自分にとって、もしかして死は何の終わりにもならないのだろうか。そんな事を考え、今日も訳の解らない事を言いながら再び伸ばされた手に、か細い声を上げた。

お酒の話は、以前ツイッターで回って来た、「後輩が酒飲めますよと強がって酔い潰れたので仕方なくホテルに連れてってやったら、扉が閉まった瞬間、酒、飲めますよって言いましたよね？　って酔い潰れてた筈の後輩に壁ドンされる」っていうシチュが元ネタです。
　手錠は、クロウのあの服と手錠の組み合わせって最高だなあと。ジョーカーだと、むしろ違和感なさすぎて困りますよね(・ㅂ・)
　革紐のやつは、和姦……何か幸せな和姦を、と。

strap

「うん？　何だ、こいつ」
冬の寒い日の午後。
日が傾き始めた中、二人で街を歩いていた時、明智が不意にそんな声を上げた。その声に顔を上げ彼の視線の先に目を向け、そこにいたものを見て納得した。
明智の目線の先。
足元のアスファルトの上を駆け回りコートの裾にじゃれついていたのは、一匹の仔犬だった。
小型犬種の仔犬ともなれば、その身はひどく小さい。膝を落とし前足の後ろに手を入れると、軽々と抱き上げる。
「首輪はついてるな」
「じゃあ迷子か、おまえ」
尻尾を振っている小さな仔犬は毛並みもよく、いかにも人馴れした愛玩動物といった様子で、真っ黒な目を明智に向けている。
迷子の犬を拾ったら、どうするのか。警察へ届ければいいのか。連れ帰って張り紙でもして飼い主を探すのか。そんな事を話している間に今度は背後から知らない人間の声が飛び込んで来た。
「こんなところにいた」
と、泣きそうな顔で息を切らしてこちらを見ているのは、仔犬と同じ様にまだ未成熟な年齢の少女。手にした、動物を引く為の細い紐を見れば、少女が何者で自分達の何を見ているかを察するには充分で。
「もう逃がすなよ」
明智がそう言いながら身をかがめ、抱き上げていた仔犬を落とさない様に目の前に差し出してやる。可愛らしい色合いの首紐を首輪に繋げるのを確認してから地面に下ろし、礼を言って手を振りながら去って行った少女の後ろ姿を面白くもなさそうな顔で見送った。
以前の明智ならば穏やかに声をかけ、あれぐらいの年頃の少女であれば文字通り王子様に会ったかの様な表情になる優しい言葉と笑顔を向けてやっていただろうが、今の明智の横顔に、愛想は欠片もない。口元は不機嫌そうに歪められ、眉を寄せ、目つきにも険がある。
探偵王子などと言われ、大衆にもてはやされていた頃から比べれば別人の様な佇まいだが、それも無理はない。
「ったく……飼い犬にはちゃんと、紐つけとけっての」
呆れの色の混じった声で言うが、すぐに何かに気付いた様に苦笑する。
「……ああ。俺も今は飼い犬みたいなもんか。なあ、俺にも紐つけるか？」
「あのな……」

苦虫を噛み潰した表情になった自分に明智がまた笑う。
その笑い方はあの頃からは考えられない様な皮肉気なものだが、当然だろう。
事件後、落ち延びた彼は冴と特捜の管理下に入り。
今は自分を後見役として制限のある生活を送る事になったのだから。

あの怒涛の様に過ぎ去った一年の中で起きた事件。
その事件の大方が終わり、後は大人達の仕事になった頃。
明智が生きていると教えられた。
驚いた様子を見せない自分に首をかしげる冴に、予想していたからと答えると、呆れた顔をされる。
『話したでしょう。獅童の船が沈んだ時の事。あの状況で、竜司を助けてくれる可能性があったのが誰か、考えるまでもないですから』
むしろ、いつになったら会いに来てくれるのだろうと思っていたと言うと、ますます呆れた顔をされた。
『それで、いつ会わせてくれるんです？』
笑って言った自分に、冴は苦笑して肩をすくめた。怪我がひどい事。捜査に協力するのを条件に特捜に鼻薬を嗅がせた事。当人の心の整理がまだついていない事。故に、もう少し待てと。
そして、やっと明智に再会を。面会を果たしたのは、季節がいくつか移ってからだった。
やっと面会に応じてくれた明智は、あの頃の様に猫をかぶって好意的な言葉と態度で迎えてくれる事はなく、しばらくは毒と皮肉に塗れた言葉ばかりだった。
『また来る。何か必要なものとかあるか』
『ねえよ。もう来んな』
『病院食って、旨くないよな。そうだ、今度パンケーキ持って来るか？』
『殺されたいのかてめえは!!』
大衆の前で穏やかな笑顔を絶やさなかった頃と比べると別人の様な言葉遣いと振る舞いを隠さない明智に冴は驚いていたが、自分にとっては明智に変わりはない。
『……おまえ、今の俺に引かねえの』
『何で？』
『……』
『今の子供みたいな明智も可愛いと思うぞ？』
『死ね!!』
全く取り繕ったところのない明智とそんな会話を自然に出来る様になった頃、退院と、新しい生活をする事になったと冴から伝えられた。
当然ながら無条件で解放される訳ではなく、特捜の管理下に置かれる。生活の全てに制限がつき、自由に人に会うのも難しいだろうと教えられた。

『監視の名目と、あと、彼の身元引受人がいないから同居人をつけようって話になってるそうだけど、本人が嫌がってるのよね』
『そりゃそうでしょうね。あいつ、神経質だし』
言ってから少し考え、それは春から大学進学で上京する自分と一緒では駄目かと提案した。
一介の学生で未成年、それも因縁浅からぬ自分が社会混乱に落とし込んだ組織の中枢だった青年の後見役となると言い出した時は、当然ながら最初はまともに相手にされなかった。だが、冴が口添えをしてくれた事と、監視対象はひとつにまとまっていてくれた方がやりやすいと思ったらしい。
もっと揉めるかと思ったが、比較的簡単に明智の外での生活の請け人として認められた。
『何で俺がおまえなんかと一緒に暮らさなきゃいけないんだよ』
むしろ難色を示したのは明智で、当然の様に反発された。
『嫌なのか？』
『当たり前だろ』
『でも、おまえもう社会的な信用ゼロだし後見人もいないし、一人で部屋なんか借りれないだろ。だったら、恋人と同棲すればいい』
『誰が恋人だ‼』
『俺が。明智の。彼氏』
『……』
以前の自分と彼は、主観的に見ても客観的に見ても、そう受け取れる関係にあった。明智がどういった意図でそういった関係を自分と結んだかについてはともかく。
『諦めろ。俺はおまえの面倒を見る為の人生設計をもう立て終わってるから』
会いに行くたびにそんな事を言い、抵抗するのにも疲れたという様子で明智が諦めるのに、それほど時間はかからなかった。
実際、社会的な後見をなくしている明智には解放されても一人で生きる為の基盤がない。
渋々といった様子ながらも、今日。
こうして、大学生活を始める為の新しい住まいに文句を言いながらも着いて来た。
「へえ。結構広いな」
「だろ。その割に家賃も手頃だし。双葉が掘り出し物件見つけ出してくれたんだ」
「ああ、あの眼鏡っ娘。さすがだな」
珍しく人を褒めながら、明智が二人暮らし向けのアパートの室内を歩き回り、あちこちを眺めている。
「あの猫は？」

「モナは、今日は出かけてる。ていうか、初日だから明智が嫌がるかと思って遠慮して貰った」
「そうか」
既に家具の運び入れも、設置も終わっている。すぐに生活を始められる環境と、気を遣う相手がいない事に安堵した様にソファに沈む明智に、夕飯は何がいいかと尋ねると「何でもいい」と返って来た。
あの頃の明智は、食べ歩きを好む男子高校生らしく食べる物に関してあれこれと注文をつけていた。
実際には食べる事にろくに関心がないのは知っていたが、本当にどうでもよさそうな態度に嘆息する。
「何でもいいって返事が一番困るんだけど」
首をかしげられ、それなら日本で一番有名な某栄養補助食品でいいと言われ脱力する。冗談で言っているのではなく、本気だと解るから尚更だ。
「そのうち、好き嫌い言わせてみせるからな」
「なに言ってんだおまえ」
不審そうな顔をするのに何でもないと答え、珈琲のカップを手渡してやった。
「……ルブランのブレンドか、これ」
「解るんだ？」
「あんだけ飲まされればな」
「惣治郎さんに頼んで、粉、分けて貰ってるんだ」
「あんまりマスターに迷惑かけんなよ」
「ちゃんと、空いた時間は店を手伝ってるぞ」
溜まり場にしてる。の間違いではないのかと眉を寄せて言われ、思い出した様に言う。
「いつでもいいから、一度ぐらいは顔を見せに来いって言われてる。みんなからも。そのうち、明智の気持ちが落ち着いたら行こう」
「……」
その言葉に返事はなかったが、にべもなく拒絶される事はなかっただけで上出来だ。
空気を変える為に、せめて米か麺類か、和風か洋風かだけでも選べと言い、心底面倒そうに応える明智を手伝わせ夕食を作り食べ終えると、呼び鈴が鳴った。
届いたのは、明智の荷物。
「ああ、こっちに送ってくれる様に頼んどいた」
言って、玄関先で受け取り運び込まれたのは、荷物と言える程もない量で。
驚き、これだけかと尋ねると、当時のマンションにあった家財道具の全ては強制的占有取得処分が執行されていると教えられる。
「ああそうだ、おまえが勝手に集めて飾ってた、変な味の炭酸飲料のペットボトルも全部押収されてるからな」
「それは構わないけど……」

戸惑った様な声になっているのが、自分でも解る。
梱包された荷物を開くと、中身は着替えと入院中に出来た僅かな私物だけだ。本当に、明智が今、自分のものとして手元に持っているものはこれだけしかないのかと、言葉にしがたい感情が沸く。
「いいんだよ。元々、部屋に物がない生活の方が長かったから慣れてるし。俺にはこれぐらいで丁度いい」
「……」
尚も何か言いかけるが言葉にならず押し黙っていると、呆れた様に嘆息される。
「風呂、先に入る」
返事を待たず浴室へ向かわれ、息をついて夕食の後片付けを始めると、明日の朝食の準備を簡単に済ませる。
それから、迷ったが、玄関先に置いたままだった自分の鞄を取りに向かった。
「……」
そして取り出したそれを見下ろし、今日、一番深い溜息をついた。
どうしたものか。何と言うべきかと考えていると、浴室の扉が開き、髪を拭きながら明智が顔を覗かせた。
「出たぞ。ここ、追い炊き機能ないんだな。冷めないうちに入れよ」
「ああ、うん」
明智は長風呂の方であるから、そんなに考え込んでいたのかと内心で驚き生返事を返すと、軽く眉を寄せる。
「何だ、それ」
言われた視線の先は、自分の手。手の中で持て余す様に転がしていたのは、細い革紐に厚みのある大き目のタグのついた、一見してネックストラップにしか見えないもの。
「おまえ、スマホにそんなもん付けてたっけ？」
「いや……これは」
首をかしげる明智に一瞬どう誤魔化すか迷ったが、今ここで誤魔化しても、どうせ先延ばしにするだけだ。
手の中で一度ゆるく握り込んでから、明智に向かってそれを差し出した。
「これ。冴さんから預かった」
「俺に？」
「うん。出かける時は必ず身に着けろって」
「……ああ。これ、ＧＰＳか」
手の中からそれを拾い上げた明智は、いくらも悩まずにすぐに答えに辿り着いた。
「なるほどな。解った。ちゃんと受け取ったって言っといてくれ」
「……」
皮肉気に笑う明智に、また言葉にしがたい感情が沸く。
冴を通して特捜から渡されたそれは、明智の言葉通り、

位置情報を記録し送信する機器だ。
明智が大した処分も受けずに解放されたのは、現行の法で彼を裁くのが難しいという、ただそれだけの理由でしかない。
実際には状況が変われば簡単に裁かれる立場の人間であり、得体の知れない才腕を持った反社会的な人物として監視下に置く必要があると判断されていると冴は硬い表情で語った。
『不愉快でしょうけど、反抗的な態度は取らない様にね』
冴自身、明智に対して思うところはあるだろうに、そう言葉を添えてくれた事に感謝はしているが、やはり不快でしかない。
「……」
凝っと視線を注ぐ自分に気付き、明智が顔を上げる。それから自分の視線の先に目をやり、困った様に嘆息した。
「あのさ。気にすんなよ。この程度の制限で自由にさせてくれるって、むしろ破格の待遇だっておまえだって解ってんだろ？」
「明智は、嫌じゃないのか」
「GPS仕込まれるぐらい、……前に仕事してた頃にもあったし。大体、居場所知られるぐらいどうって事ないだろ？」
もう、後ろめたい事なんかないんだし。

なだめる様な声で言われ、目を逸らし、「そうだな」と答えるが、実際に覚えていたのは別の感情。
明智のすぐ脇には運び込まれた彼の荷物があったが、所定の位置に中のものを置いた今は、その荷物を入れていたケースは空になっている。そして室内に置かれた私物も、身の回りの必要最低限の必需品ばかりで。
今、明智が自分のものとして自由に出来る純粋な私物は、手にした細い革紐ぐらいなのかと考えると、さすがに陰鬱な気分にもなった。
それを口にすれば、明智を不快にさせるだけだと解っているから、決して言いはしないが。
「……」
「おい、離せよ」
言われ、手の中に残っていた革紐をいつの間にか握りこんでいた事に気付く。
「……投げ捨てたい」
「ガキみたいなこと言うなって」
たしなめの色の混じった声に手を開くと、気分を害した様子もなく手の中で弄びながら持ち上げ、軽く仰ぎ見る。
「小さいもんだな。これならぶら下げて歩いても違和感ねえか」
軽い声で言いながら、こちらに目をやる。
「これ付けてると、俺がいつ、どこに行ったか全部解るん

だろ？　誰がそれチェックするんだ？」
「とりあえずは俺、かな」
多機能携帯電話に送られて来る位置情報のデータを定期的に提出する様に言われていると隠さずに伝えると、面白そうな表情で喉の奥で笑う。
「そうか。じゃあこれは、おまえっていう飼い主が、俺っていう飼い犬につける引き紐か」
革紐を摘み上げ、また趣味の悪い笑い方をする明智に、今度こそ聞こえる様に深いため息をついた。

自分も入浴を終え出て来ると、明智はソファに沈んだまま、興味もなさそうにテレビ画面を眺めていた。
手にはあの革紐があり、手遊びの様に転がされている。
映っているバラエティ番組には以前明智と共演した事もあるアナウンサーが出ており、何がしか思うところがあるのかと考えるが、線の細い横顔にはこれといった感情は見られない。
ただ眺めているだけかと安堵し、何か飲むかと声をかける。
「水道水でいい」
「……コーヒーでいいいな」
何か反論の声を上げているのは聞かなかった事にし、カフェインレスの粉を取り出し湯を沸かすと、揃いのカップに濃褐色の珈琲を注ぎ入れる。砂糖はどうすると言いながらテレビの前へ戻ると、ソファに沈み込んだまま、小さな寝息を立てていた。
「……」
せっかく淹れた珈琲が無駄になるかなと思いながら、明智の肩に手をやり名を呼んでみる。
「ん……」
僅かにまどろんでいたという程度だったらしく、掴んだ肩を揺するまでもなく、すぐに目を開く。意識も即座に引き戻され目の焦点もはっきりとし、かけられた手を振り払い、顔を逸らした。
「明智、眠いのか」
「いや、ぼんやりしてただけだ」
風呂上がりの温かな体と温かな室内、毒にも薬にもならない内容のテレビ番組を見ていればそれも無理はない。軽く頭を振り、手にしていたカップを受け取る。
「ここ、空調がよく当たるからあったかくて。まあ、寒いよりはいいか」
言いながらカップに口をつけ、軽く視線を巡らせる。
「なあ」
「うん？」
「俺の布団、どこ？」
「え？」

尋ねられ、聞き返す。
「だから、俺の布団。俺、今日はここで寝るんだろ？」
言って、かけていたソファを示され困惑する。
「……何で？」
「何でって……ベッドひとつしかないだろ」
扉の向こうの寝室を指差され、頷く。明智が来たばかりの時にいくらもない部屋の全てを開けて覗いていたのだから、当然寝台がひとつしかないのは知っているだろう。
意味が解らないという顔をしている明智に、こちらも不思議そうな視線を向ける。
「一緒に寝ればいいだろ？」
「……っ」
当然の様に言った自分に、明智が一瞬で顔を引きつらせる。
それを見て、眉を寄せた。
「明智、もしかして誰かと一緒だと寝られないタイプか？」
「あ、いや、そうじゃなくて……」
あの頃は、じゃれ合いの様に同じシーツに包まって寝たものだったが、本当は嫌だったのだろうか。
視線を逸らしながら言いよどむ明智に、なら今日は自分がソファで寝ると言うと、またそうじゃないと言う。
「明智？」
意味が解らずに顔を覗き込むと、まだいくらかの躊躇を見せてから、こちらを見る。
「……なあ」
「うん？」
「その。……する、のか？」
目を瞬かせる。
言葉の意味は解る。今更勿体をつける様な事ではない程度には、繰り返してもいる。
自分の中で、彼に対するそういった欲がなくなった訳でもない。
さすがに、越して来たばかりの今日はゆっくり休んで貰おうと思っていたが、そんな風に聞かれてはどういう意味だろうかとこちらも不思議に思う。
「駄目か？」
「駄目……じゃ、ない、けど」
珍しく歯切れの悪い言い方に首をかしげる。
明智は万事において毅然とした態度と物言いを崩した事はない。荒い口調で真情を吐露した時でさえ、それは変わらなかった。
一体どうしたのだろうかと内心で当惑する。
「嫌なら、そう言ってくれればいいけど。……無理強いしたりはしないぞ？」
もしや、本当は嫌だったのに我慢して付き合わせていたのだろうかと背筋が寒くなる。

「だったら、ごめん」
「違う、そうじゃない」
「違うのか？」
「違う」
「だったら、何だ？」
ならばどういう意図を持った問いかけなのかと尋ねるが、明智は困った様な視線をさまよわせているだけだ。
「……」
尚も黙ったままの明智に近付くと、頬に手を伸ばす。
顔を上げた明智の手から持っていたカップを取り上げると、盆の上に戻しすぐ傍のガラステーブルの上に置き、顔を引き寄せた。
「……っ」
驚いた様子で目を見開くが、逃げようとはしない。そのまま唇を重ねると、目を閉じた。
軽く触れ、離し、その表情を覗き込んでから、もう一度重ねる。久しぶりに味わう柔らかな感触をゆっくりと味わう様にして楽しむと、名残惜しげに唇を離す。
見返した相手は、はあ、と息をつき目を逸らしてはいるが、拒絶の色は見えない。
首筋に手を伸ばし撫で下ろし襟元から指先を差し入れてみるが、ひくりと震えるだけで。肩を掴みソファの布の上に身体を引き倒してみても、やはり抵抗の色はない。

「明智」
「……」
「嫌なら、そう言ってくれ。そうしたら、すぐにやめるから」
「……」
返事はなかったが、覆いかぶさりもう一度唇をふさぐと、あの頃よりもいくらか細くなった指先が背に回された。
「……っ、ん」
ひく、と震える肌は、最後に身体を重ねた時に比べると、手と同じ様に細くなっている様に思える。
夜着の合わせに手をかけひとつずつ釦を外し前を開けると、予想通り、記憶にあるものよりも肉付きが薄くなっていた。
不健康な痩せ方ではないのにほっとするが、複雑な感情は消えない。
また唇をふさぐと、顎を掴み歯列を開けさせ、舌を差し入れる。
口内の柔らかな場所を舐めながら舌を絡め、軽く吸い上げる。小さく噛み、吸い、絡め合わせ、それに応える様になるまで執拗に口内を犯すと、緩慢に自分から舌を差し出して来た。
こくりと細い喉が上下したのを感じ唇を離してやると、

黒檀の双眸を潤ませた明智が、とろんとした表情で自分を見上げている。
その表情にゆるりと笑むと、ふいと顔を背けた。その態度に笑いながら、耳元や顔にキスを散らして肌をなぞる。胸元を這っていた指先が小さな尖りに触れた瞬間、びくりと身を震わせた。
「……んっ、ぅ」
「生活音程度の防音はしっかりしたとこだから。声、我慢しないで出していいぞ」
そう言うが、明智はちらりとこちらを見ると、唇を噛んで声を噛み殺す。ぐり、と指の下にあるものを転がすと小さく声を上げ、すぐにそれを飲み込んだ。
何を意地を張っているのかと思いながらもう一方の胸に顔を寄せると、ぺろりと舌先で舐め上げてから甘噛みを繰り返した。
「ん……んっ、ぁ」
この場所で快楽を得られる様になっている明智の胸の小さな肉粒は、自分の舌と指に応えて物理的な反射とは違う反応を返し小さく尖り立っている。
唾液で濡れそぼり立ち上がっている場所を音を立てて吸ってやると、喉に詰まった様な声を漏らした。
「そ、そこばっかり、いじる、な……っ!」
「何で？　好きだろ、ここ」
胸だけで達する事が出来るまで弄り倒した事だってある。両方を指でくりくりと捏ねて軽く摘んで引いてやると、腰を浮かせて細い声を上げた。
「声、かわいいな」
久しぶりに聞く上ずった悲鳴に目を細めると、明智の頬が一瞬で紅潮する。目を見開き、それからまた顔を背けて唇を噛んだ。
その態度に、内心で首をかしげる。
肌を重ねる事で得られる悦楽を、明智は知っている。いつも、多少強引にこの行為にもつれ込んでも、本気で抵抗する気がない時は、仕方ないなと言いながら、いくらもしないうちに甘い声を上げ始めるのが常だった。
それに比べれば今は合意の上である筈だし、抵抗せず逃げようともしていない。だが、明智は顔を背け声を殺し、目を合わせようとはしない。
「……明智」
「……」
「明智、やっぱり嫌か？」
低く聞くと、背けられていた顔が目を開き自分を見上げる。
「違うって、言っただろ……」
「でも。何かいつもと違うし」
自分も大概な人間だとは思うが、唇を噛み締め、目をき

つく閉じて顔を背け声を殺している姿に、さすがに何も思わないほど節度のない人間ではない。
もしも、本当は本意ではないのなら。例えば、生活費と家賃代わりにこの行為を受け入れようとかそんな風に考えているのなら、やめて欲しい。
そう訥々と言うと、赤褐色の双眸が呆れた様な色を浮かべるが、それから、また視線を逸らせた。
やはり何か理由が。と思っていると、明智が視線を迷わせ迷わせ、こちらが不安になる程度の時間、沈黙が落ちてから、口を開く。
「……だよ」
「え?」
何を言ったのか聞こえず目をしばたたかせる。もう一度、と促す様に先を待つと、苛立った様にもう一度繰り返す。
「……恥ずかしいんだよ!」
「は?」
「だから……おまえに声とか、顔とか……そういうの見られるのが恥ずかしいんだよ! 解れよ!」
「……」
今度は、意味が解らずに沈黙した。
自分と明智が肌を重ねた回数は、両手では到底足りない。溺れる様にして手に入れた相手を求めたし、明智がそれを拒んだ事もほとんどなかった。触れていない場所などないし、ほくろの場所と数すら言える。
そんな相手に、今更、恥ずかしい?
明智には悪いが本気で意味が解らず当惑していると、それを見透かした様に、言葉を続ける。
「だって、おまえ……もう、俺の過去とか、やった事とか、全部知ってんだろ……」
「それは、まあ」
冴から伝え聞いた事と教えられた事はそれなりにある。自分は彼について知らない事が随分あったのだなと思う程度には。
それがどうかしたのかと思う。
「だったら……あの頃の俺の態度が演技だったって解ってるだろ」
「うん」
あの頃の明智の年齢不相応な穏やかな態度が造ったものであるのは理解している。全部が全部ではなく、あれも明智の一面だとは思っているが。
「知ってるけど……それが?」
「……だから……」
あの頃の明智は、大衆の好む振る舞いや人物像を作り、演じていた。それが必要だったから。
だが、その仮面の下の顔を知った上で、「今の子供みたいな明智も可愛い」などと言う自分が相手なら、もう、隠

し考も、取り繕うのも、萎縮する為の演技も必要ない。落ち着いた穏やかな年上の男を演じ、余裕のある態度でからかう様な言動も、もうしなくていい。

例え演じたところで、どうせ自分には全て見抜かれるのだから、素の表情を見せればいいと思ったのだが。

「おまえに、その、……そういう顔、見せるのかって思ったら、何か……無茶苦茶恥ずかしくなって来て……」

「……」

「だから、顔……見る、な……」

言って、両手で顔を覆ってしまう。指の間から見える顔と耳は、はっきりと赤さを増していて。

「……」

組み敷かれたまま、そんな事を言い募る明智に、何も言えず沈黙する。

それから、圧し掛かったソファの脇に転がった物を手に取ると、顔を隠そうとしている明智の手首に、それをかけた。

「え……」

かけたそれを引き、端と端を手早く繋いでしまうと、痛みを覚えないであろう程度に束ね、結んでしまう。

顔から手を外され、突然の事に何をされているのか理解していなかった目が見開かれ、唖然とした色を浮かべる。

「ちょ……おい、おまえ何を……っ」

「明智。顔、見せて」

問いかけには答えず、ひとまとめにした両手首を頭上で押さえつけると、当惑していた表情がまた一瞬で紅潮する。

「バカ……っ！　見るな、って……！」

「やだ。無理」

くすくすと笑いながら顔を近付け、額や頬や目許に唇を落とす。ぴく、と震えまた頬に血を昇らせるのを楽しげに見下ろす。

自分に飾らない素の表情を見せるのが恥ずかしいから見るな、などと。そんな可愛い事を言われて、解った、見ないと言えるほど人間が出来ても、枯れてもいない。

押さえ付けた手から逃れようともがくが、するりと滑り下ろした手で下肢を撫で上げると、身を跳ねさせた。

「おい、これ、外せ……っ！」

「だから、やだ。明智の顔、見たい」

「……っ、おまえ、よりによってこれで縛るとか、性格悪すぎだろ……っ！」

その言葉には反論がない。明智の手首をまとめ拘束したのは、あのGPSの付いた革紐。さすがに一瞬は躊躇したが、手の届く位置に、他に適当なものがなかったのだから仕方ない。

ひどく楽しげに笑う自分を明智が涙目で見上げて来るが、年上とは思えないどこか幼い表情に、そんな顔をする

のは反則だなあと思う。

「これ外せっ！」

「涙目で怒るのも、反則だ」

顔を寄せ、ひちゃりと唇を舐め上げると、息を詰めた。

下肢に当てたままの手を腰へ回すと、脇腹から腰へとなぞる様に滑らせてから、下衣を引き下ろした。

「待っ……ぁ」

慌てた様に止めさせようとするが、既にゆるく立ち上がっているのを見て口角を上げる。膝を擂り合わせて脚を閉じようとするのを間に体を入れて阻むと、視線を絡ませたまま今度こそ明確な愛撫の意図をもって手の中に握り込んだ。

「んッ」

先端を指先でくじり、全体をやわく締め付けながら手のひらで上下に煽り立てると、身体を捩って小さく喘ぐ。

「ん……ぁ、ぁ」

指を絡め先端の裏を指の腹で擦り上げると、素直に熱と硬さを上げて行った。こぼれた先走りを指で掬い塗りつける様に広げてやると、響き始めた粘度の高い水音に、羞恥からかまた目許に涙を滲ませた。

「気持ちいい？」

「うる、さい……っ」

荒い言葉を返しながらも、気付いているのかいないのか自分の手に腰を押し付けて来る。ソファのクッションに広がる色素の薄い髪は明智が荒い息を漏らす度に揺れ、軽い音を立てては少しずつ乱れて行った。

「やめ、や、ぁ、あっ」

拒絶の言葉よりも嬌声の方が大きくなり始め、擦り立てる度にその声も切迫したものになる。どこか懇願する様な響きが混じっているが、言われずとも焦らす気はないし、そんな余裕もない。

「ひ、あっ、ぁっ」

くぷくぷと音を立てながら声が高くなる場所ばかりを捏ね、手と指全てで全体を擦り上げる。細い両脚に引きつった様に力がこもり、先端にゆるりと爪を立てて解放を促すと、細い悲鳴を上げながら白い喉が反る。

「……っ、ぁ、ぁ、……っ」

切れ切れに声を上げながら手の中に白濁が吐き出される。温かな感触に口角を上げると、手を押さえつけられたままの明智を見下ろした。

はあはあと荒い息をつき、涙を滲ませながら吐精の余韻にひくひくと身体を震わせている。

「明智」

「……」

「かわいい」

「うる、さ、い……見る、な」

こんな顔を見るな、と耳まで染めて言う表情に目許をゆるめる。
自分の知っている明智は、いつも頭のどこかに冷静さを残していたのか、或いは緊張を解いていなかったのか、こうやって欲を吐き出させても、いくらかの放心はあれどすぐにその目に理性を戻していた。ひとつしか違わないのに年上風を吹かせ、余裕を見せて。その表情を崩したいとむきになった事がある様に、こんな時でもどこか悠然とした笑みを浮かべていた。
だが今はそんな余裕は見えず、とろりとした表情と、濡れとろけた双眸。誘う様に薄く開いた唇から覗く舌とひどく赤く見える色を無防備に晒している。淫靡にも稚くも見える姿に、知らず喉が鳴った。
「ちょ、待て、そこは……っ」
唇を舐めながら、濡れた指先を脚の奥の窪みに伸ばす。前から垂れたもので既に濡れていた入り口を指の腹で撫で付けると、驚いたのか腰が浮き、跳ねた。
だが、濡れ、ひくついている場所はさしたる抵抗もなく指を飲み込んで行く。
「や、め、少し、やすませろ……っ！」
「ごめん、俺も早く明智に入れたくて限界だから」
言いながら埋め込んだ指をくるりと掻き回し、ほぐす様にして抜き差しを開始した。

「あっ、ん、ん」
頭上で押さえつけられたままの手は、達したばかりでかが入らないらしく弱々しい抵抗をしているが、それも指を増やし入り口を開く様にして柔らかな縁を捏ねれば、誘う様にそこをひくつかせた。
「や、そこ、ぁ」
埋めた指を折り、探り当てた内壁をぐっ、と押し上げると、熱を吐き出したばかりのものが、またくぷりと先を濡らし首をもたげ始める。
「あ、あ、ぁ」
「明智、きもちいい？」
もう一度尋ねると、今度は小さく頷く。
熱い内壁の柔らかく膨らんだ場所を円を描く様に辿れば、明智の意思を無視して、勝手に収縮し喰んだ指を奥へと誘い込む様に指に絡みつく。
開いた口元からこぼれる媚びる様な声はもう噛み殺す余裕もなく、絶え間なく切迫した吐息を漏らし続けている。
わざと音を立てて乱雑に指を突き立て羞恥を煽る言葉を落としても、受け入れた指を締め付け腰を揺らすばかりだ。
「ぁ……」
明智の先端からこぼれるものが絶え間なく下腹を汚す様になった頃、くちりという水音と共に指を引き抜く。
「ふ、あ、ぁ……」

すっかり弛緩した身体は紅潮し汗を滲ませ、荒い呼吸を整えようと開いた口を喘がせている。
手首を押さえつけていた手を離しても、もう抵抗する気配がないのを確認し、両脚を抱え上げた。力の入っていない身体は簡単に転がされ、腰を浮かせ脚を大きく開かせても、上気した頬を更に赤くするだけだ。
前をくつろげ取り出したものを濡れ光りひくついている場所に押し当てると、はあ、と諦めとも期待ともつかない声を漏らす。
取り出した性器は我ながら苦笑するほど昂ぶり張り詰めていて、自分はどれほど目の前の相手に欲情しているのかと薄く笑う。
「ぁ、や、ぁ、や……ンっ」
入り口にぬちぬちと先走りを塗り込める様に捏ね、その度にびくびくと身体を震わせる明智の声と、すがる様な色を浮かべた双眸を思うさま眺め回す。明智から入れてくれと懇願して来るまで楽しみたかったが、震えながら吸い付く様に絡むぬかるみにそんな理性はいくらも持たず。
揺れた腰が先端を僅かに飲み込んだのに合わせ、一息に最初のくびれまでを埋め込んだ。
「ぁ……あ、あ、ぁ……っ！」
「……っ」
悲鳴と紙一重の声が上がり、痛くないかとその顔を覗き込むが、その声が苦痛を訴えるものではないのは、しゃぶる様に絡みつくとろけた内壁と、それ以上に甘くとろけた明智の表情で解る。
「ふ、ぁ……あ、ぁ」
一年以上触れていなかった身体だ。
最初は受け入れるのに苦労するかもしれないと思っていたのだが、押し入れるごとにわななく身体が、断続的に締め付けながらも自ら招き入れる様に顫動する。それでも慎重に中程まで埋めては腰を引き、時間をかけて中を馴染ませて行く。
そんな動きに、最初から奥まで入り込んで来ない事に安心したのか、僅かに力を抜いたところに、
「い……っ、ぁ、あっ！」
不意打ちで根元まで楔を打ち込んだ。
「……っ」
同時にきつく締め上げられ思わず声を漏らすが、はくはくと浅い呼吸を必死に繋いでいる姿に、無意識の動きだったのが解る。
手を伸ばし、しっとりとした手触りを返す髪に指を差し入れ、苦しくないかと幾度も囁きながら耳朶を噛むと、切れ切れの呼吸に、また甘いものが混じり始めた。
「……動くぞ？」
「え、……っ、ぁ、まって、あ」

胸の尖りを摘み上げると、明智が小さく声を上げ身を捩る。同時に最奥まで飲み込んだものを反射的に締め上げ、敏感な内側で打ち込まれたものの大きさと温度をしゃぶる様にして味わってしまい、引きつった様な声を漏らした。
「ま、て、って、ぁんっ、ぁっ、ぁ」
脚を抱え直し細い腰を支えると、制止する声を聞き流しゆるゆると身体を揺らし始める。
根元まで全てを飲み込まれ、明智が認識出来るゆっくりとした動きで引き抜き、また突き入れる。その度に押し出される様に高い声が室内に響いた。
「ぁ、はぁっ」
まだ苦しさが残っているのか時折眉を寄せるが、無意識に逃げようとする腰を引き戻しては狙った場所ばかりを削ぎ上げれば、上ずった悲鳴が上がる。
「やめ、そこ、ばっかり、やめ……っ！」
「気持ちいいだろ、ここ」
「つよすぎ、る……っ！」
堅く反り返った先端で中をごりごりと抉れば首を打ち振るい、いつも綺麗に櫛を入れられていた髪が無造作に乱される。生理的なものなのか悦楽によるものなのか判然としない涙をこぼしながら、革紐で戒められた手で懸命に自分の体を押し返そうとする。
拘束された手首を苛立たしげによじらせながらの、ろくに力の入らない抵抗など可愛いものだが、さすがにほどいてやろうとし、だが、ふと思いついた。
「な、に……っ」
掴んだ、まとめられた手首をゆるく引く。
ほどいてくれるのかとでも思ったのか小さく安堵した様な吐息を漏らすが、手首を革紐で戒めたまま、自分の首に回させた。
「……っ、」
自分から相手の顔を抱き寄せる様な形になったのに気付き瞠目し、次いで頬に朱を刷き、罵声でも浴びせようとしたのだろう。口を開きかけるが、それよりも先に背に手を回す。
「え……っ」
意図を悟ったのか咄嗟に逃れようともがくが、肩に回した手に力を込め強引に上体を起こすと、そのままもたれかからせる様にして明智の身体を膝の上に抱き起こす。
「や、やめ……っ！」
最後まで言い終える前に膝裏に手を入れ両脚を抱え上げてしまうと、それまでと違った角度と、自重により飲み込んでいたものに最奥まで容赦なく貫かれる事になり、悲鳴を上げた。
「は……ぁ、ぁ、っ……」
「……いい声」

掠れた声を上げ、ひぅひぅと息を繋ぎながらしがみつく明智に、喉を鳴らしながらその表情を眺める。
「明智、かわいい」
「ば、か、これ、やめろ、深い……っ！」
「……奥、当たってる。明智、ここも好きだもんな」
言って先端の当たる場所をごつりと突いてやると、上がりかけた抗議の声がまた中途に途切れる。
身体を引いて逃れようにも脚を抱えられ、両腕は戒められたまま、自分の首に引っ掛ける様にして回されている。自由にならない自分の身体への苛立ちと下肢を埋める熱に目許を淡く染めてこちらを睨みつけて来るが、そんな表情も可愛いばかりだ。
薄く笑い、腕に指先を走らせる。
「……あの紐。これじゃ、ほんとに俺と明智を繋ぐ引き紐みたいだな」
「ふざける、なぁ……っ！」
鳴き声混じりの罵り声に苦笑し、だがやめてやる気など欠片もなく、上体を抱えた脚ごと抱きこむ様にして埋まったものを僅かに抜くと、また奥深くまで突き入れた。
「っは、ぁ、あっ、やめ」
「さっきも言ったけど、限界だから無理」
「この、ゴミ……っ、ん、ぁ、あ」
まだ罵倒する気力は残っている様だが、それも喘ぎ混じりでは迫力などない。深く入り込み最奥まで穿てば、上ずった鳴き声が上がった。
「ほら、動くぞ」
汗の伝う首筋に遠慮なく痕を残し、下肢の柔らかなぬかるみを音を立てて穿つ。
単調な動きしか出来ない体勢だが、深く飲み込ませ、一番奥と弱い内壁を文字通り抉る様にして攻め立てるには丁度いい。何より、隙間なく肌を重ね合わせ、甘える様に首に腕を絡める明智の表情を、隠すものもなく眺めることが出来るのは恐ろしく昂ぶった。
「深、ぃ、って……、くる、し……！」
奥まで押し込まれ背後に回された手が爪を立てるが、そんな痛みは逆に嗜虐的な感情を沸き起こすだけだ。弱い場所ばかりを穿ち手荒に揺すり立てれば、苦鳴混じりだった声がまた濡れた色を含んだものに変わる。
細い腰を掴み、次第に激しくなる律動で隘路を行き来させれば、熱い内壁がうねる様に肉杭にまとわりつき終わりを誘う様に全体を舐め締め付ける。
色づいた唇から漏れるのと同じ様に荒い息を自分もこぼしながら、目を細める。
「入り口は狭くてぎちぎちなのに、中はやわらかくてとろっとろで、無茶苦茶気持ちいい」
「そんな、の、言わなくて、いい……っ！　バカ……っ、

先ね、屋根裏のゴミが……っ!」
　口の悪さに笑いながらも動きは止めず、ぐちゃぐちゃと押し込み弱い場所ばかりを穿てば、そんな悪態も掻き消え、甘ったるい嬌声だけが響く様になる。
「……やらしー顔」
　挑発の色を込めて鼻のつく距離の年上の青年の表情を揶揄するが、もうそれにも憎まれ口は返って来ない。
　自分の首に両腕を回し身体を支えている明智の顔は汗と涙と唾液に塗れ、薄く開いた口元からはひっきりなしに熱い吐息と濡れた声が漏れている。初めて見る、煮えた飴の様に潤み熱を持った、理性の溶けた双眸に生唾を飲み込む。
「明智。本当にかわいい」
　薄く笑いながら言うと、腕を引き自分から顔を近付け、貪る様に唇を重ねて来た。
「ぁ、ふ、ぁ、ンっ」
「ん……」
　絡む唇が、舌が、口の中が熱い。
　こんな、呼吸を奪い合う様な貪欲なキスを明智からされるのは初めてだ。
　混じる唾液を懸命に飲み下そうとするが、口端からこぼれ顎を伝い、目の端から溢れた涙と混じり合って、とろりと胸に滴る。あの、取り澄ました青年の端整な顔容が嘘の様な乱れた姿ととろけた表情に限界の近い下肢が更に熱を上げた。
「明智。中に出すから。いいよな」
　こちらも息を荒げながら囁くと、狭隘なうろが吸い付く様に波打ち、奥へと誘う。
「っは、ぁ、奥、くる……あ、ぁっ、あき、らぁ……っ!!」
「……っは、いきなり名前呼ぶのも、反則、だろ」
　あの冷たい鉄扉に遮られた時、一度だけ呼ばれた自分の名前。
　その響きの甘美さに堪え切れず、堪える気もなく、ごり、と一際強く先端を押し付けるのと、明智が掠れた悲鳴を上げるのは同時。次いでびくびくと身体を震わせ、それからすがりついていた手から力が抜けた。
　明智の腹に耳を押し当てたら、中に注ぎ込まれる白濁の、どくりという音が聞こえるのではないかと思う様な勢いと量を狭い場所に注ぎ込みながら、大きく息をつき浅く呼吸を繋ぐ。
　きゅう、と最後に甘く中が先端を喰むのを心地よく感じながら、ひくりと震える身体を抱き締め、それから濡れた身体が冷えるまで唇を重ね続けた。
　すっかり冷めてしまったガラステーブルの上の珈琲を下げると、新しく淹れ直した湯気を立てる濃褐色で満たされたカップを持ち、部屋へ戻る。

「明智」
「……」
カップを置き、自分に背を向けてソファのクッションに顔を埋めたままの明智の髪を指で梳き上げながら楽しげに名を呼ぶが、返事はない。
久方振りに触れた肌に抑えが効かず、いくらか無茶をしたのは素直に反省している。
肉体的にもそうだが、何より、散々苛まれ以前の彼ならば決して口にしなかったであろう言葉を言わされた明智の心情は、察して余りある。反省はすれど、謝る気は欠片もないが。
二度とやらないと約束する気もないので、床に転がっていた細いものを拾い上げる。
「明智。これ、明日買い替えに行こう」
手にしたのはあの、GPSの付いた革紐。明智の手首を拘束し、今はほどかれ床に落とされていた物だ。
明智がクッションから顔を少しだけ外し、肩越しにちらりと視線をやり、眉を寄せる。
「この紐のとこ。別のやつにしよう。色は、赤がいいよな」
「……色なんか、何だっていいけど」
無骨な革紐は飾り気のない地味な色合いだが、今の明智がそれを気にする筈もない。それが解っているから、笑って言う。
「駄目だよ。これ、犬の引き紐なんかじゃなくて、俺に繋がってる赤い糸だから」
なくすなよ。
と、当然の様に言った自分の言葉に、明智の顔がまた赤くなったのが、背を向けられたままでも解った。

表紙：旭炬 様

旭炬センセイは、いつもワタシの明智君の拘束ネタに対する気持ち悪い訴えをうんうんと聞いてくれて、その上、本の表紙まで描いてくれるヤバいぐらい心の広い方なので、たぶん人間じゃなくて女神か何かなんだと思います。

内容に合わせた縛られてる明智君三種まで描いてくれるとか、嬉し過ぎて死ぬかもしれません。ラフ拝見した時、早朝だったんですけど一瞬で目が覚めて変なうめき声上げました。

この後ろ手に拘束されて転がされてる制服姿の明智君のアンモラルさと、温度のない無骨な手錠と王子様衣装のクロウの禁欲さと、縛られてる、でも幸せな少し細作りの俺智くん、旭炬センセイの絵の優艶さと合わせて、眼福でございます。この眼鏡のしたり顔、ムカつくと同時に、せやな、明智くん可愛いからしゃあないな……ってなりますね(・∀・)

は一神棚に上げて拝んどこ。たぶんワタシ畳の上では死ねないわ。死因は何て書けばいいんでしょうか困りますね。

いつもくだらない話を聞いてくれてありがとうございます！　またOV話とかしてくださいね！

アティック トラッシュ ドロップ デッド
Attic trash Drop dead

-R18-

Persona5
Hero×Akechi Fanbook
2017/12/29

発行：れもんやま
書いた人：きとろん
連絡先：powaso666@gmail.com
pixivID：1116652

表紙：旭炬 様
pixivID：116177